りゝと。きちんと。ちやんと。(三)目かどを立ててにらむさまにいふ語。こゝは(一)の意。

保元物語、白河殿攻落の條に「兜の鉢を丁とうち」

平家物語、二、小松教訓の條に「障子を丁と引きたてて」

【鍔際】ツバギハ。刀身と鍔との相接するところ。

「鍔」とは、刀劍の柄と刀身との間にはさむ金具。ひらたくて孔がある。これに刀身を貫いて柄頭に入れる。形は圓若しくは方で、大小いろ〳〵の種類がある。

【得たり】「得たりかしこし」などいふと同じで、「うまくしでかした」「思ふつぼにはまつた」などの意。

鎌田兵衞名所盃、上に「寄手、源平色めくところを、爲朝得たり賢しと、さし取り引き取り雨の如く」

【むずと】「むんずと」ともいふ。(一)急に力をこめて。勢ひつよく。(二)憚らずおしきつてするさま。こゝは(二)の意。

古今著聞集、十七に、撫でける手をむずととりてけり。(二)

平家物語、光頼卿の參内の條に「信頼卿の座上にむづと着きたまふ」(二)

【かたみに】たがひに。相共に。各自。

宇津保物語、初秋に「深き心いひ契らせ、かたみにあはれなる事を、心とゞめて打ち言はせ」

【利腕】キヽウデ。右方の腕。

曾根崎心中に「利腕取つてどうする事ぞ、麁相をするな。」

【しかと取り】しつかりとつかみ。力づよく握り。

【捩ぢたふさんと】ねぢつてたふさうと。

「捩づ」(ネヅ)とは、くねり曲らせること。逆にまはすこと。ゆがめまはすこと。ひねりまはすこと。ねぢること。

【えい聲】「曳聲」の漢字をあてる。えい〳〵と力を入れて發する聲。

宇治拾遺物語、一に「すぢりもぢり、えい聲をいだして、一座を走りまはり舞ふ。」

【揉みつ揉まるゝ力足】互に足に力を入れて揉（モ）みあふこと。

「力足」(チカラアシ)とは、力をこめた足。

蟬丸、二に「惡しく倚らば蹴殺さんと、力足をどうと踏む。」

「揉みあふ」とは、互に觸れあひ、摩れあつて爭ふこと。

【これかれ齊しく】信乃も見八も一樣に。

【身をまろばす】からだをころ〳〵ところばすこと。

「まろばす」は「轉ばす」の字を當てる。廻轉させること。ころばせること。

枕草子、八に「鼠のいまだ手もおひぬを、巣の内より數多まろばし出でたる」

【覆車の米苞云々】フクシャのタハラ。車がひつくりかへつて、積んでゐた米俵が、ころ〳〵と坂をころげおちるのと何のちがひもない。

「覆車」は、車のひつくりかへること。又、その車。

潘岳の西征賦に「追二覆車一而不鑑。」

【勾配嶮しき棧閣】傾斜の急な崖地にかけわたしてこしらへた高い建物。こゝは芳流閣をさしていふ。

「勾配」(コウバイ)とは、傾斜の度。

「棧閣」(カケヅクリ)は「懸造」の義、溪又は流れ川などの上にかけわたし、又は山・崖などへ持たせかけて造ること。又、その家。

中務内侍日記に「かけづくりなるに、柴垣・遣水などはかなきものから」

【とゞまるべくもあらざめれど】「ころびおちようとするのをくひとめて、屋根の上にとゞまらうとしても、到底止まれさうではなかつたけれども」といふほどの意。

「あらざめれど」は「あらざるめれど」の略。

「めれ」は、推量の助動詞で、「めり」「める」「めれ」と活用する。

【幾十尋】イクジッピロ。「尋」は長さの一單位。兩手を左右にのべ、左手の端から右手の端に至る間の長さ。凡そ六尺。

萬葉集、卷五に「みなわなすもろき命もたくなはの千尋にもがと願ひ暮しつ」

【程もよし】「よいあんばいに」といふほどの意。

【舷】　へり。船のへり。ふなべり。ふなばた。ふなだな。

【水煙】　ミヅケブリ。又、ミヅケムリ。(一)水面に立つ霧。水蒸氣。水氣。(二)水が飛び散つて、煙のやうな細沫をなすもの。飛沫。しぶき。こゝは(二)の意。

天網島、下に「野田の入江の水煙、山のは白くほの〴〵と」(一)

葉村句集に「月に對す君に唐綱の水煙」(二)

【纜】　トモヅナ。「艫綱」の義。船をつなぎとめる綱。

和名抄、十一に「纜、度毛豆奈、維レ舟索也」

後拾遺集、別に「筑紫舟まだともづなもとらなくに、さしいづるものは涙なりけり」

【早川】　ハヤカハ。流れの早い川。

萬葉集卷四「うつくしとわれもふ心はやかはのせきとせくともなほやくづれむ」

【直中】　タヾナカ。まんなか。正中。

【追風と退く潮に云々】　「信乃と見八とがころびおちた此の船は、追風と退く潮とにさそはれて一入早く流れゆく水上をくだつていつたから、忽ちのうちにゆくへがわからなくなつてしまつた。」といふほどの意。

「追風」(オヒテ)は、(一)追ひさまにうしろから吹き來る風。(二)船を吹き送る風。順風。(三)吹き入る風。(四)衣などの香を傳へる風。こゝは(二)の意。

竹取物語に「船に乘りて、追風吹きて、四百餘日になむまうで來にし。」

「退く潮」(ヒくシホ)は、沖へ引き去る海潮。

「往方」(ユクヘ)は「行方」とも書く。(一)進みゆくさき。行つた方。(二)成りゆく末の方。落ちつくさき。ゆく末。將來。前途。こゝは(一)の意。

萬葉集、卷十五に「さ夜ふけて、ゆくへを知らに」

9　挿圖

芳流閣上の奮闘

南總里見八犬傳初版の木版本に挿入せられた挿圖を轉載した。

二一　弟を戒む

1　解題

高山樗牛がその弟齋藤信策に與へた書翰である。本課採錄にあたつては「人生讀本」に據つたが、もと樗牛全集第五卷「想華及消息」の中に收められてゐるものである。

樗牛全集は高山樗牛の全作品を蒐集編次したもので、姉崎嘲風、齋藤信策の共編。明治三十七年、東京、博文館發行である。

2　作者

高山樗牛　タカヤマ　チョギウ。

名は林次郎。明治二年(一八六八)山形縣鶴岡に生れた。第二高等學校を經て、帝國大學文科大學哲學科を卒業し、第二高等學校教授となつた。後、職を辭して博文館に入り、雜誌「太陽」に文藝批評の筆を執り、文名一世に鳴つた。三十年、文部省から歐洲留學を命ぜられたが、肺患のため果さず、病痾を湘南の濱に養ひつゝ筆を呵した。其の思想の變遷を見るに、初め日本主義を唱道したが、後個人主義に傾き、遂に美的生活本能主義を說き、ニイチェを紹介し、爲に是非の論が一時に沸騰した。晚年日蓮を研究し、特にその人格を敬慕した。三十五年歿、年三十四。

3　編纂の用意

書翰文體の文の讀解又は作文の練習に充てることと、學問する上についての心得を知らせることと、この二つの任務を帶びしめて本課を置いたのである。

4　要旨

年少の學徒としては如何に心得て研究修養すべきかの指針を示したものである。

5　概說

第一節(一四四頁——一四四頁七行)

手紙文としての前書き。

第二節(一四四頁八行——一四五頁末行)

今の教育の弊害として、器を作るが人を作らぬ點を指

高山樗牛

摘した。

第三節（一四六頁一行――一四六頁五行）

立身の第一義は人物の修養にあることを提唱した。

第四節（一四六頁六行――一四七頁末行）

人物修養の方法としては古人を友とすべき旨を述べた。

第五節（一四八頁一行――一四九頁二行）

人物修養の目標としての大人物を有すべきことを諭した。

第六節（一四九頁三行――終）

學問の眞工夫は那邊に在るかを說いた。

6　取扱上の用意

▲候文體は生徒にはそれほどなじみの深いものでないから、その讀解にはよく注意せしめる必要がある。

口語體の手紙文に書改めるなどの練習をやらせることもよいであらう。

▲かういふ候文を讀んだ時を利用して作文と聯絡して、短い候文を作る練習をすることも計畫されて然るべきである。

▲樗牛がこの書翰で意見を吐露した修學、修養上の注意は、今日といへども生命のあるものである。生徒修養上一考せしむべきである。

7　設問

1　器を作りて人を作らずといふ意味は。

2　活字引、活書籍とは何を意味するか。

3　九牛の一毛とは何のことか。

4　寶の山に入りて手を空しくして歸るとは何か。

5　當來二世の意味は。

8　釋義

【寂寞】　セキバク。物さびしいこと。ひつそり。ひそやか。

莊子の刻意に「恬淡、寂寞、無爲、此天地之平而道德之質也」

【物思ふべき】　モノオモふべき。この「べし」は自然に物が思はれるといふ意味であつて、自然にさうなる意である。

【修學】　シウガク。學問ををさめること。

漢書の敍傳に「見生亹々束髮修學」

【くさ〳〵】　種々。いろ〳〵。さま〳〵。

【學徒】　ガクト。學問修業するともがら。學生に同じ。

晉書の袁環傳に「給二其宅地一備二其學徒一」

【肝腎】　カンジン。物事の主要なこと。大切なこと。肝心、樞要などいふ意味に用ふ。

【愚見】　グケン。愚なる意見といふ意にて自分の考の謙稱。愚考。

晉書の王渾傳に「臣同二國體一義在二盡言一敢陳二愚見一觸犯二天威一」

【やゝもすれば】　どうかすると。

【器を作る】　キをツクる。器とは長所、技能、才能といふ意。こゝでは單に才能だけを作る。

【器量】　キリャウ。才器と量。物の用に立つべき才能。有爲の才能。

文選「夫其器量弘深、姿度廣大」

その他「かほだち」にもいふ。

【はた】　又に同じ。もまた。

【思案】　シアン。考へめぐらすこと。おもひ。かんがへ。工夫。思索。思考。

陸士衡の文に「思二案之一愈深」

【あるべく候】　この「べく」は當然をあらはすもので、當然思案すべきであるといふ意。

【近くは】　チカくは。最近の。近頃の。

【所詮】　ショセン。つまり。結局。

【宏量】　クヮウリャウ。度量の大きいこと。

【技術家】　ギジュツカ。技術に長じたる人。又は、技術を業とする人。こゝでは勿論前者の意

【富者】　フシャ又はフウジャ。大金持。財產のあるもの。富める人。

孔子世家に「富者送レ人以レ財、仁人者送レ人以レ言」

【一般】　イッパン。おなじ。同樣。一樣。似てゐること。

釋齊己の翠翠詩に「竹裏歸來色一般」

【京童】　キャウワラベ。みやこの若者。きやうわらは、

【活字引】　イキジビキ。見聞廣く何事もよく知つた人。博議であるが應用の才無き人。こゝでは後の方の意、

【活書籍】　イキショセキ。活字引と同じ意味に用ふ。

【勘考】 カンカウ。考へること。思案すること。思考。考慮。かんかへ。

【歸着】 キチャク。かへりつくこと。一點に落ち寄ること。其處にをさまること。

【標點】 ヘウテン。目じるしに記す圏點。目あての標識。目標のある所。

【大安立】 ダイアンリュウ。安立は、安心立命の略。安置建立の意。

無量壽經に「上教化安立、無數衆生」

安心してそこに落つくことにいふ。

【眞生命】 シンセイメイ。本當の命。こゝでは智識として單にもつてゐるだけでなくそれを實際に活用させる生命のことにいふ。次の眞活動も同じ意である。

【顚倒】 テンタウ。順序をちがへること。さかさま。

詩經、齊風、東風未明に「顚倒衣裳」

【行住坐臥】 ギョウジュウザグヮ。行くと、とゞまると、坐すると、臥すと。卽ち、行儀ふるまひ。佛家にてはこれを四威儀といふ。

心理觀經に「行住坐臥、受諸苦惱」

【一念時】 イチネンジ。念は佛教の語で極めて短い時間にいふ。

仁王經に「一念中、有九十刹那」

とある如く、念時も極めて短い時間といふ意である。

【味讀】 ミドク。あじはひ讀むこと。吟味してよむことにいふ。

【熟量】 ジュクリャウ。熟慮に同じ。よく〳〵考へること。とくと思ひをめぐらすこと。

【無量劫】 ムリョウコウ。極めて長久なる時間。限量なき時間。

【泡沫夢幻】 ホウマツムゲン。泡や夢や幻といふことで極めてたよりないものにいふ。古來これらのものによせて人生の無情をのべてゐる。

【豪傑】 ガウケツ。才德の衆に秀てたる人、武勇ある人

孟子、滕文公に「彼所謂豪傑之士也」

【九牛の一毛】 キウギウのイチマウ。多くの牛の中での一本の毛といふことで、大多數の中での一つといふことに

て、比較のとれぬ程些細なことにいふ。

文選、司馬遷の報任安書に「假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛、與螻蟻何以異」。

【とや言はん】 といはうか。

【龜鑑】 キカン。鏡、模範、手本。龜はトの具。鑑は鏡で共に行ひの基準になる。

書書の劉賁傳に「元凱之考之考課何先。叔子之克平何務。惟此龜鑑、擇乎中庸」

【覺悟】 カクゴ。豫め心構へすること。用心期待。

【寂寞】 セキバク。聲なくしてひつそりとしてゐることにいふ。

【古蹟】 コセキ。古跡。故跡。古きあと。昔、物事のありて今は廢れてゐる土地にいふ。

【照臨】 セウリン。月日が上からてらしのぞむこと。轉じて神佛が人を監し又君主が天下を治めることにもい。

書經、泰誓に「若日月之照臨光于四方」

【撈りて】 トりて。

【聲聞】 シャウモン。梵語。舍羅婆迦の譯。聲を聞く者の意。弟子とも譯す。卽ち佛の教をきいて、證悟する出家の弟子。舍利弗、目蓮等の如き聖者。こゝでは偉大なる佛の教。

【默契】 モクケイ。暗々の間に、互に意志の一致すること。

【會通】 エツウ。彼我相違の義を和會疏通し調節して同一意たらしめること。

肇論に「同我則非復有無、異我則乖會通」

【三昧】 サンマイ。心を一所に集中せしめること。心を正しうし妄志を去ること。

智度論に「善心一處住不動是名三昧」

【異身同體】 イシンドウタイ。身體は異なつてゐる質は心が同じであるといふこと。この體は「心」といふ意味である。

「異體同心」 といふことと同じ。

【謂ふべけれ】 イフベけれ。いふべきであるといふこと。

【這個】 シャコ。支那、宋時代の俗語。これ。この。といふ意。佛家の用語。物を指す言葉。

祖庭事苑に「這、當レ作レ者指レ事之辭也」

【強く申すべし】 ツョクマウすべし。強くいつて見よう。

【理想】 リサウ。未だ實現されてはゐないが實現可能にしてしかもそれが欲求せられ求められる可能のあるもの。目的といふに同じ。

【大眼目】 ダイガンモク。主要な所。要點。
傳燈錄に「參學眼目、臨機直須二大用一」

【信奉】 シンポウ。信じ奉ること。「彼の信奉する主義は」

【營々】 エイエイ。利欲にあくせくするさま。
庾信の連珠に「脣齒喋々、市井營々」

【中宵】 チュウセウ。よなか。夜半。
晉書祖逖傳に「每レ語二世事一、中宵起坐」

【標的】 ヘウテキ。目じるし。まと。てほん。
晉書の王彪傳に「爲レ政已レ道、以レ得レ賢爲レ急、非レ謂レ雍二容廊廟一標的而已上」

【融和】 イウワ。とけてやはらぐこと。意志の疎通して和睦すること。打とけて中よきこと。

【暗中】 アンチュウ。眞暗のやみの中。

【廣野】 クッウヤ。廣々とした野原。

【彷徨】 ハウクッウ。行きつもとりつすること。うろつくこと。さまよふこと。
莊子、逍遙遊に「彷徨乎、無レ爲二其側一」

【天涯萬里】 テンガイバンリ。「天涯」は空のはて。遠方の地。こゝでは、遠方の地萬里までもといふ意。

【孤客】 コカク。一人の旅の人。孤獨の旅人。
謝幼時の詩に「孤客傷二逝湍一徒旅苦二奔峭一」

【一期】 イチゴ。佛教の語。(一)人が生れてから死ぬまで。一生。いちごしやう。一生涯。
保元物語の爲義最後に「人の身には、一期の終りを以つて一大事とせり。
(二)人の死に臨める時。臨終。末期。
「一期の灌頂。」
こゝは(一)の意。

【抽象に馳せ】 チウシャウにハせ。「抽象」は、事物または表象の或る側面または性質のみを抽き離して把捉する心的作用をいふ。「抽象に馳せ」は、具體的でなく純理論的になること。

【會得】 エトク。事の意をさとり心に得ること。心にさとり知ること。合點すること。のみこむこと。了解。

【名士】 メイシ。世間に名を知られた人士。名高い人。
禮記の月令に「季春之月…勉二諸侯一、聘二名士一、禮二賢者一」

【觀心】 クッンジン。心の本性を明かに觀察する事。心は萬法の主であるから、心を觀察するは、即ち一切の事を究め、理を觀じ盡す事であるといふ。天台宗の一念三千の觀法の如きもの。
神皇正統記の四に「道邃より四代に當れる義寂といふ人まで、唯觀心を傳へて、宗義を明らむる事絶えにけるにや。」

【自得】 ジトク。みづから心にさとりやすんずること。
中庸に「君子無二入而不二自得一焉。」
太平記の一の玄慧文談に「吾れ無爲の境に優遊して、是非の外に自得す。」

【無量無邊】 ムリャウムヘン。數量を以て測り難く邊際ない義。即ち廣大なること。

【劫】 ゴフ。佛教で、極めて長時間の意。

【消耗】 正しくは「セウカウ」とよむ。セウモウは誤讀である。

【所詮】 ショセン。つまるところ。つまり。

【當來二世】 タウライニセ。「當」は現現「來」は未來の意。現世と來世と。

【如說修行】 ニョセツシュギャウ。佛の教にかなふが如く修行すること。如法修行ともいふ。

二二　物の初

1　解題

幸田露伴の「洗心錄」中の「物の初」の一篇を採つたものである。

「洗心錄」は幸田露伴の隨筆集で、「樂地」以下六十章が收めてある。その題號については、序文の一節に

「‥破窓風は燭を翳し、穿屋月は牀を侵すの生涯を了せる杜詩之の集に讀耽りし因に、ふと句中の二字を假りて洗心錄と題しぬ。亦是遇然のみ、何の故ともなし」

と記してある。

大正三年、東京、至誠堂發行。

2　作者

幸田露伴　カウダ　ロバン。

名は成行、舊幕臣幸田成延の三男。慶應三年(一八六七)江戸に生れた。明治二十三年處女作「露團々」を發表し、引續いて、「風流佛」「一口劍」「五重の塔」「風流微塵藏」「新浦島」等を世に送つた。

當時の文壇に於ては尾崎紅葉と併稱された。漢籍佛典の造詣が深く、よくその格調語句を作中に活用して一家の風格を大成した。後、小說に筆を絕ち、隨筆、修養談等を著した。

明治四十一年には京都帝國大學文科大學の講師となつて江戸文學を講じたが幾くもなくこれを辭し、風流三昧に日を送つた。四十四年二月には文學博士を授けられた。昭和十二年文化勳章を拜受した。

著書は前記の外に、葉末集・小萩集・有福詩人・諷言・長語・潮待ち草・天うつ浪・賴朝・努力論・修養論・露伴叢書等がある。

3　編纂の用意

現代の文語文の一つの模範として、現在文章家としての者宿幸田露伴の文を讀ませることにしたのである。又隨筆の妙味といふやうなものも併はせて味はせたい。

4　要旨

色々な物の「初」の樣と感とを品定めして來たものである。それらを通じての作者の心の基調は、物の初に萌え

立つ力を感ずる悦ばしさ、物の初の心を失はぬやうにとの希求に歸着するやうである。

5 概況

各節毎に、一つの物の初を敍してある。原本の頭註にも各〻の小見出しを左の如くに附してある。

年の首
日の出づる初
月の昇る初
潮の初
樹の初
萩の初・菘の初
禽の初
魚の初・蛇の初
馬の初
獅子の初
人間の初

6 取扱上の注意

◪高雅にして風韻を具へた語句を巧に使用して文に美しい綾を織成してゐるところは流石當時の代表的文章たるを肯かしめるものがある。今日の文章の備ふべき文の趣が、これと同樣であるとは言はれないけれども、文の重要要素の一つに表現といふものを考へる限り、かうした文詞といふものは、決して見遁すべきものではない。よくこの文章を吟味し鑑賞せしめたい。

◪擬人法が巧に使用されてゐる。これをよく味はしめて、各自の作文上の參考に資せしめたい。

◪漢字に特殊な訓讀を用ひてゐるところが相當に見えてゐる。これは讀誦にあたつて注意せしめる必要がある。

7 設問

1 係結の例を文中から搜し出せ。
2 對句の使用の巧みな箇所を見出せ。
3 敍景、敍事の妙所を指摘せよ。
4 擬人法の巧妙と思はれるものを擧げよ。
5 譬喩の上乘なる箇所を言へ。

釋義

【初こそは】「こそ」は特に取出して强くいふ語であるが、「は」は更にその「こそ」を强めたのである。

【美はしく】ウルはしく。うつくしい。

【おもしろけれ】「初こそ」と前にあるので「おもしろけれ」と已然形で結んだのである。

【混沌】コントン。天地がまだ開けず、陰陽の未だ分れない前の狀態。

鶏冠子に「兩儀未レ分、其氣混沌。」

【わづかに】(一)辛うじて。やつとのことで。(二)少しばかり。こゝでは(一)と(二)との兩方の意味を含んでゐる。

【剖けて】サけて。解剖の「剖」である。ヒラけてとも訓みたい。わかれること。

【成りし時】ナりしトキ。出來上つた時。完成した時。

【目ざまし】メざまし。目の覺める程立派である。驚きあきれる程すばらしい。

【心よかり】ココロよかり。快し。(一)樂しい。愉快だ。うれしい。(二)氣もちがよい。きみがよい。こゝでは(二)の意味である。

【けん】過去の推量を表はす助動詞。「……ただらう」。

【年の首】トシのハジメ。新年。元旦。

【朝ぼらけ】アサぼらけ。夜の明けて太陽がまだ地平線上に現はれぬ間の晴れた空の薄明りが朗かに見える頃。夜あけがた。

源氏物語に「うちとけぬ朝ぼらけにいで給ふ」
枕草子に「さゑもんのぢんへいきしあさぼらけなんつねにおぼし出でらるる」

【大路】オホヂ。都市の幅の廣い街。小路の對。

萬葉集に「青によし奈良のおほぢは行きよけどこの山道は行きあしかりけり」

【簾目の浪】ハウキメのナミ。簾目は地面を掃いた簾のあと。そのあとが波形になつてゐるので、簾目の波と修飾して言つたものである。

【千門】チカド。「千」は多數であることを表はす。「門」は門や家のこと。千門は澤山の家ほどの意味。

【旗の日の紅】ハタのヒのクレナヰ。紅は鮮かな赤色。日の紅は日の丸のことである。「旗の日の紅」は「日の丸の旗」のことである。

【行き交ふ】ユキカふ。行きちがふ。行き通ふ。通る。頻繁に人通りのあること。

【面の色】オモのイロ。かほいろ。

【後悔】クヮイコン。あやまちを後悔して殘念に思ふこと。

【昨夜の關】サクヤのセキ。元旦のことであるから、昨夜は大晦日の夜である。大晦日から元旦に移る時を「關」としやれたもの。從つて前の悔恨は去年の悔恨を意味してゐる。

【風の息吹】カゼのイブキ。「息吹」は息を吹くこと。息。「風の息吹」は簡單に云へば「吹く風」といふのに等しい。

【蘇らせ】ヨミガへらせ。生きかへらせ。

【眼の中の威勢】メのナカのイキホヒ。眼の色の輝き勢あることをいふ。

【好もし】コノもし。すきである。氣に入る

【紅盤】コウバン。紅色のたらひ。赤く輝いてゐる太陽を言つたのである。

【焔旋りて】ホノホメグりて。太陽を見てゐると、赤い焔がくる〳〵廻るやうに見えるのを言つたのである。

【瑪瑙】メナウ。潛晶質珪酸の一種。蛋白石・玉髓・石英の順序で岩石の空隙中に層狀に沈澱して生ずるもの。通常中心部に空隙を殘し稀に液體・氣體等の包裹物を含む。膠狀珪酸に類する瑪瑙は岩石の崩壞に際し獨立して分離すること多く海濱・河岸等に產する。縞狀または雲形の色彩を呈するのが常で、裝飾品とする。種類が多い。

【瑪瑙たぎる〻】太陽の赤く輝いてゐるさまを形容して、赤色の瑪瑙の爛熟したやうだといつたのである。

【樹影沈んで】コカゲシヅんで。木の影が靜かな水に深くしいんと映つてゐるさまを言つたのである。

【暮靄】ボアイ。暮れがたのもや。

【白玉】ハクギョク。白色のたま。

【潤】ウルホヒ。しめり。

「白玉潤を含んで大いなること車輪の如き」までが「月」にかゝる修飾句である「月」の次の「の」は主格の「の」である。

【薄縹】ウスハナダ。縹色の淡いもの。螢草の花のやうな色。

【…そつと出でたる】そつとイでたる。連體形で中止してゐる。卽ち、「樹影……出でたる」それだけで主語になつてゐるのである

【潮】シホ。うしほ。海水が、日月の引力に作用されて高くなつたり低くなつたりするのをいふ。

柳樽に「差すと引く潮は天地の息使ひ」

【亦】マタ。いはゆる「モマタ」といふもので、前にこれと述べて來て、これも亦といふ時に使ふので、「又」とは一寸異る。

【沙】スナ。「砂」とも書く。

【汐木】シホギ。濱邊にうちよせられる木や枝のことをさす。鹽竈を焚くに用ひる薪といふ意味の鹽木とはちがふのである。

【小白む】「さゝ」は接頭語で「さゝやか」「いささか」「小さい」「こまかい」の意をあらはす。從つて「小白む」は「まつしろ」になるのではないのである。

【寄藻】ヨリモ。浪・風などで流れよつた藻。

【干汐】ヒシホ。引潮である。海水が月の關係位置によつて二四時間五〇分中に二回退落する時。

【さし潮】さしシホ。次第次第に押し寄せて高まる潮。

【風に乘り來り】カゼにノりキタり。潮が風と共に押し寄せて來るのを、あたかも潮が風にのせられて來るやうに言つたもの。

【一分々々】イッブンイッブン。イチブではなく、時間を言つたものである。

【蝕ひ】ムシクひ。蟲が物を喰つてそこなふやうに、浪が砂の部分に喰ひ入つてくるのを「蝕ひ」と言つたものである。

【磯】コイシ。小石の意味である。

【潮泡】しほたは　しほのあわの約。滿潮のとき潮水の上に出來るあぶく。

【渚】ナギサ。河・海の、水と陸との界の汎稱。波の寄せ返すあたり一帶の地域。なみうちぎは。

【豆蟹】マメガニ。「豆」は接頭語で、小さい意をあらはす。

【奔る】　ハシる。素早く走ること。

【海鷗】　カイオウ。鷗は、カモメ科中カモメ亞科に屬する水禽の總稱。邦産五十七種に達し、體は中大、翼長く、尾は比較的短く多くは角尾である。脚は比較的短く、蹼足。嘴は楔狀を呈し、上端鉤狀をしてゐる。魚群を追ひ群飛するから、漁業上の目標となる。こゝではどの種か分らないが、海にゐるので「海鷗」と言つたものであらう。「海」には大した意味はない。

【ぬれ〳〵て】　ぬれてといふのに等しいが、擬古的な云ひ方であり、「ぬれ〳〵」といふ音調にも心理的な効果は認められる。

【邊波】　ヘナミ。邊の方に立つ波。

萬葉集に「奥の浪邊浪立つとも我がせこがみ舟の泊り波たゝめやも

續古今集に「熊野河せぎりにわたす杉舟のへなみに袖のぬれにけるかな」

【まろぶ】　漢字を宛てれば、「轉ぶ」。囲を活用させたもの。ころがつてゆく。ころがる。

【艶やか】　ツヤやか。光澤があつて美しいさま。うるほひがあつてつや〳〵してゐるさまにいふ語。

【磯石】　イソイシ。磯にある石を言つたもの。

【未だもの言はず】　イマだものイはず。磯石に浪が押し寄せて音を立てるのを「もの言ふ」と擬人的にいつたもの。

【濤なほ怒らねど】　ナミなほイカらねど。前の「磯石未だもの言はず」と同じで、濤が荒れ立つのを「怒る」と言つたのである。

【澎湃】　ハウハイ。水勢の盛なさま。又、波の相擊つさま。

玉篇に「澎湃、水聲」

【轒轄】　ダウタフ。(一)鐘・太鼓などの音。(二)波または瀑布の音。

集韻に「轒轄、鐘鼓聲」

【震天撼地】　シンテンカンチ。普通は「震天動地」「震天駭地」といふ。天地をふるひ動かすこと。また威力または音響の盛なるにいふ語。「震撼」(ふるひうごかす。)を分けて「天地」を間に狹んだのである。

【無字】　ムジ。佛語。從容錄第十八則趙州狗子より出た禪家の公案。狗に佛性有りや無しやと問うた二僧に、趙州從諗禪師が一は有と答へ、一は無と答へたのから、その眞相を究明しようとするもの。しかしこゝは文字の書かれてないといふだけの意味である。

【大經卷】　ダイキャウクヮン。經文を記した書卷。經典。それの大きなものを言ふ。

【千古萬古】　センコバンコ。とこしへ。永遠の世。無限の時間。永久。よろづよ。萬世。「千古」、「萬古」の中一つでも意味は同じである。二つ重ねると意味も調子も強くなる。

【人間にその讀まんことを逼る】　ニンゲンにそのヨまんことをセマる。「その」は無字の大經卷即ち澎湃轒轄の波をさす。

【凄じ】　スサマじ。(一)氣が進まない。面白くない。興がさめる。殺風景である。

枕草子に「すさまじきもの、晝吠ゆる犬、春の網代」

源氏物語に「冬の夜のすめる月に雪の光りあひたる空こそ……すさまじきためしに」

(二)ものすごい。

源氏物語に「影すさまじき曉月夜に」

新古今集に「山里の風すさまじき夕ぐれに木の葉みだれて物ぞかなしき」

(三)驚きあきれる。

浮世風呂に「今うめたもすさまじい」

こゝは(二)の意味に用ひた。

【意】　意志の意である。

【壯なる狀】　サウなるサマ。盛んな樣子。

【挺んで】　ヌキんで。拔き出て。獨りたかく突き出ることに言ふ。

【駐め】　トドめ。馬をひきとゞめる意味。先へ行くのを押へとゞめる。留めるといふるのに近い。

【山逕】　サンケイ。山の小道。

【青むる】　アヲむ。青くする。

【喬樹】　ケウジュ。高い樹。

北史の儒林傳に「王孝籍奏、待二越人之舟楫一、求二魯匠之雲梯一、則必縣二于喬樹之枝一、沒二于深泉之底一」

【なよやか】　なよ〳〵してゐるさま。

【雨の膏】　アメのアブラ。膏は物を養ふもの、養ひとなるものである。植物にとつて雨は養ふものになるので、雨の膏といつたのである。

【怡び】　ヨロコび。

【風の笞】　カゼのシモト。風は樹木にとつてはその成長を苦しめ妨げるものであるから笞と形容した。笞は鞭のことである。「雨の膏」と同巧である。

【うるむ】　(一)玉または漆の色などの透明でなく、曇つてゐることにいふ。(二)染色などの場合に曇つて鮮かでなく、光澤のうすいことにいふ。(三)哀別などの場合に、涙のために聲の明瞭を缺くことをいふ。こゝは勿論(三)の意味である。

【をののく】　ぶる〳〵ふるへて恐れる。

【不屈】　フクツ。志を變へないこと。服從しないこと。撓まざること。

【虐ぐ】　シヘタぐ。むごく取扱ふ。苦しめる。シヒタグとも訓む。

【偃し】　フし。うつむく。

【復】　マタ。ふたゝび。

【起き】　オき。うつむいたのが又元に戻ることをいふ。

【霜はづかしむ】　シモはづかしむ。霜が樹木をおかすのをかういつたのである。

【萎ける】　カジける。足や手などが凍えて思ふやうに働かなくなる。

【日の父の光】　ヒのチゝのヒカリ。父を日にたとへたので、かういつたのである。

【月の母の露】　ツキのハゝのツユ。「日の父」と同巧である。「日」「父」といつたので「月」「母」といつたのである。

【自ら貞しうし自ら貞しうして】　ミヅカらタゞしうしミヅカらタゞしうして。反復してあるのは、正しく心がける上にも心がける意を藏するのである。「貞し」は「正し」であるが、その上に、固く取り守る意を兼ねる。主として人格についていふ。

【生を遂げる】　セイをトゲる。自分の壽命を全うする。しかしこゝでは生きようとする樹木の意志を强調してゐる。

【孔孟】　コウマウ。孔子と孟子。

【道】　ミチ。孔孟の道である。以上すべて樹木の樣子を擬人的に譬喩を非常に利用してゐるから、そのつもりで讀まねばならない。

【菽】　マメ。豆類の總稱。一說に大豆の異名とも云ふ。和名抄に「大豆一名菽粉」

【菘】　ナ。一種の菜。たうな。すゞな。かぶ。

【初】　ハジメ。菽の芽生えはじめ、菘の芽生えはじめの意である。

【甲柝】　カヒワレ。植物の種子の發芽するとき種皮を破つて子葉の發いたもの。

【しほらし】　控目でかはいらしい。おとなしくかはいらしい。可憐である。

【や】　感動の助詞である。

【地壓すれば】　チアッすれば。地が壓するのでの意味である。

【芽ざす】　メざす。草木の芽が出る。めぐむ。芽をふく。

【屯まる】　トゞまる。途中でものの進行のしばらくとまりやむこと。

【根入】　ネイリ。柱などの地中に入込んだ深さをいふ。「根入り三尺」など。こゝでは根が地中に入ること。

【辛うじて】　カラうじて。やつとのことで。

【世に出でたる】　ヨにイでたる。地下に芽を吹き出したことをかう言つたのである。「出でたる」と連體形で止めたのは、次の「夢を結べる如き」の連體形で止めたのと共に、主語になつてゐるのである。

【嫩青微綠】　ドンセイビリョク。嫩はワカイ。若葉のみどり色をいふ。又その葉を言ふこともある。

【おぼつかなし】　(一)分明でない。はつきりしない。古今集に「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼ぶ子鳥かな」(二)心もとない。不安である。不審である。

源氏物語に「六十卷といふ書讀み給ひ、おぼつかなき所所解かせなどしておはしますを」

(三)待ち遠しい。もどかしい。

源氏物語に「いとど長居侍らひ給ふを、大殿にはおぼつかなく恨めしくおぼしたれど」

こゝでは(二)の意味である。

【二葉】フタバ。草木の芽出しの二枚の小葉。

【めでたし】(一)愛すべきである。賞すべきである。(二)甚だ美しい。極めて麗はしい。特に好い。誠に結構である。(三)吉い事があつて、悦ばしい。祝ふべきである。(四)人に欺かれ易く、又はそゝのかされやすい性質である。お人好しである。愚かである。にぶい。愚鈍である。こゝでは(一)の意味。「めでたけれ」と已然形で結んであるのは、「力こそ」と上にあるからである。

【禽】トリ。

【卵殼】カヒコ。(一)卵に同じい。たまご。とりの子。今も高知縣等に方言として殘つてゐる。

景行紀に「武卵王」

萬葉集に「うぐひすの、生卵の中に、ほととぎす、ひとりうまれて」

和名抄に「卵加比古鳥胎也」

(二)殼に同じい。から。

靈異記「殼可比古」

【啐啄】サイタク。「啐」はのむ。「啄」はついばむ。

【事了りて】コトヲハりて。「……し終つて」の意である。

【綿毛】ワタゲ。綿のやうに柔い羽毛。にこげ。

【あはれに】「あはれ」は感動詞の轉用。助動詞なりに連なり、廣く喜怒愛樂の情調を表はすに用ひる。こゝでは親しみの意をあらはして副詞に用ゐたもの。

【嶰】タニ。山澗の間。

【韻】ヒビキ。

【藏す】含んでゐる。底に持つてゐる。

【鐵翮】テッカク。鐵のやうに強い翼の意である。

【颶】俄に強烈となる風。

【蔽りて】キりて。

【崑崙】コンロン。崐崘(書經)、昆侖(山海經)とも書く。今の崑崙山系の中部をさせる稱呼。古來美玉の產地、黃河の發源地として知られる。

【崑崙を凌ぐの威を具ふ】コンロンをシノぐのヰをソナふ。高い崑崙の山をもとび越すやうに高くとぶ威勢を持つてゐる。

【苗】ベウ。なへの義であるが、こゝは魚について言つてゐるので、やはり魚の卵からかへつたばかりの若い時を言つたものである。

【江湖】カウコ。河と湖。尙參考までに、轉じて一般世間の事に用ひる。

莊子に「不レ如レ相忘於江湖一」

【寸】スン。少し、わづかの意である。蛇は小さい中からの意である。

【藪澤】ソウタク。水の無いさはと、水のあるさはと。草木の叢生せる大きな澤地。

史記に「鶴明已翔二乎寥廓一、而羅者猶レ視二乎藪澤一」

轉じて物の多く集まる所に云ふことある。

【傲る】オゴる。人を見下す。横柄にかまへて人を輕蔑すること。

【定かならぬ】サダかならぬ。はつきりしてゐない。

【四蹄】シテイ。ひづめ。或は四つ足の意味にとつてもよい。

【はやくも】まだ馬が生れたばかりだのに「もうすでに」といふ意味である。

【追ひつくやがてに】追ひつくとそのまゝすぐにの意味である。

【あとなく】普通は「あどなし」の形である。「あどけなし」に同じい。卽ち無邪氣である。小兒などの思慮なくことを行ふ樣に言ふ。

【至健の德】シケンのトク。極めてすこやかな本性。

【怒毛】イカリゲ。獸類などの怒つて逆だつ毛。

【獅子の子の怒毛も未だ硬からぬに】これは獅子の怒毛がまだ柔いといふのだから、生れたばかりで若いことをあらはしてゐる。

【千尺の崖より墜されて】非常に高い崖の上から親獅子に谷底へつきおとされるのである。このことは獅子の育兒法として昔からよく謂はれてゐる事柄である。

【嶮巖】ザンガン。けはしく聳えた巖石。

【さすがに】(一)さうはいふものの。しかしながら。(二)本分に恥ぢず。何といつてもやはり。本分に背かず。期待のやうに。本來の面目通りに。こゝは(一)の意味である。

【仰いで】アフいで。上を向いて。

【霞に遠き】カスミにトホキ(ハルカにトホキ)。カスミと訓めば谷底から仰ぐ親獅子の姿が遠くて霞にへだてられてゐるやうだと形容したことになるし、「霞」は「遐」に通じて、ハルカとも訓まれるから、はるか遠くでもよい。どちらにしても意味にさして變りはないと思はれる。

【兒ごころ】コごころ。親を思ふ、たよりない子の心持。

【やるせなき】言はうやうのない。

【獸王】ジウワウ。獅子は昔から百獸の王と謂はれてゐる。獅子をさしたのである。

【血統とて】ちすぢだから。

【よろづのものを觀るに】いろんなものをよく〳〵觀察して見るのに。

【好し】ヨシ。こゝろよい。樂しい。好ましい。面白い。愉快である。

【その始ある所以を遂げん】そのハジメあるユエンをトげん。物に皆始のあるそのよつて來る原因に副ふやう始の始らしさを十分に發揮したい、といふ意。

9 挿圖

潮のはじめ

夜明けの磯にさし潮の波頭の寄せてゐる景。

育兒古訓

獅子がその幼兒を千仞の谷に墜して試るといふ說によつて描いた圖。

筆者竹內栖鳳は京都派を代表する現代日本畫壇の耆宿である。

二三　浮島が原

1 解題

源頼朝の擧兵のことを聞いて、奥州にゐた弟の義經が、遙々加勢に馳せ、浮島が原に於て兄頼朝に對面した、その場面を寫したもので、原文は、義經記卷第四に、「頼朝義經に對面の事」といふ題で出てゐる。

「義經記」(ギケイキ)は八卷。室町時代の作といはれ、作者は詳かでない。

源義經の一生を題材とし、鞍馬の山の寺籠りから、高館の一炬、城頭の灰燼と化するまで、事實そのものが已に劇的な主人公の面目を寫して(殊に頼朝と不和になつてから後が委しい)略ぼ成功に近いもので、後の義經物は皆これを唯一の典據にしてゐる。王朝時代の多くの物語は個人の戀愛を寫し、鎌倉時代の軍記物語は戰鬪生活を集團的に寫したが、室町時代に入るや、この二傾向を融和して、個人の戰鬪生活を寫しながらも、一面王朝式戀愛生活の情趣を漂はせた新傾向の作品に曾我物語と義經記とがある。義經記中の重要人物たる辨慶は軍記物語の主人公らしく、靜は王朝式の戀と武家の氣概と藝術家の矜持とを併せ得た我が日本に於ける久遠の女性(いつの世の誰人もが女性の典型とする)で、この二人が義經に從帶してゐるだけでもこの記の內容に數段の精彩を帶びしめるものがあるのに、佐藤莊司が二子の誠忠、龜井・片岡・伊勢・駿河・藤原秀衡・忠衡夫妻・鬼一法眼・頼朝など、その周圍の人物にも特異なものが多い。たゞ作者の義經觀は、今日史家が見る義經とは大分趣が變つてゐて必ずしも正しいとは思へない。(宇治・勢多・一の谷・屋島・壇の浦の奮鬪振りはあまり記さないで、却つて部下の機轉で無事に關所を越した勸進帳の場面や堀河夜討などをこま〳〵と書きたててゐるやうな點)行文も一般に冗漫の嫌があるけれども、描寫に眞實味が籠つてゐて、流石にかいなでの作者でないことを思はせる。

2 編纂の用意

我が國少年に最も親しまれ懐かしがられてゐる源九郎判官義經を題材とした室町時代の作品「義經記」の中の一節を讀ましめてその讀解力を養ふと同時に、浮島が原のゆくりなき對面に於て、兄頼朝との間にかはされた純情あふるゝばかりの對話を、深い感銘を以て讀みとらしめ、併せて、次課「鵯越」を講讀する上の豫備知識を得させたい。

3　要旨

兄の大事の企てを聞いて、遙々馳せ參じた義經、信頼すべき相手がなくて心細く思つてゐた際、ゆくりなくも肉親の弟を迎へた頼朝、しかもこの二人は、幼少の時相別れたのみで、今まで相見る機會を與へられなかつたのである。かうした異常な場合に於ける異常な兄弟の對面である。骨肉の眞情は遺憾なく發揮せられる。本課ではこの二人の心情を十分に讀みとらしめたいものである。

4　概說

第一節（一五五頁――一五七頁七行）　義經が浮島が原に着いてから、頼朝に對面するに至るまでの筋道を敍した。

第二節（一五七頁八行――一六一頁二行）　頼朝の陣の樣子と、兄弟對面の光景、殊に頼朝の言葉を錄した。

第三節（一六一頁三行――）　頼朝の言葉に對する義經の挨拶を記した。

5　取扱上の注意

◆相見てまづ涙に咽ぶところは、利害の念を超越した美しい光景であるが、頼朝の言葉を聞き、義經の言葉を聞くに及んでは、そこに相異なるものが見られるやうに思ふ。

◆即ち二人ともに父のことを述べてゐるが、義經のは單になつかしさをこめて「今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。」といつてゐるので、それ以外には何もなく、いはば情熱的であるが、頼朝のは、身一人で困つてゐることをのべた上に、「今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿よみがへられたまひたるやうにこそ思ひ候へ。」といつてゐるので、對面のよろこびに、幾分かの理智が含まれてゐるやうに考へられる。しかも、「八個國の人々を初として候へども、皆他人なれば」とか、「皆平家に相從ひたる人々なれば」とか、「他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、かへつて東國をや攻めんと存ずる」とかいふ所は、當時の實情ではあつたとしても、何か神經質な、猜疑深い所が出てゐて、後年頼朝が義經を斥けたことも偶然ではないやうに思はれる。

◆又頼朝の言葉の中に、八幡太郎義家と新羅三郎義光との先例を思ひ合はせたのは自然ではあるが、その說明の仕方が、著しく調子を弱くさせてゐる。これは戰記物によく見る失敗の點である。

6　設問

1　「覺束なし」（一五五頁末行）とあるは、何故であらうか。

2　この文の中から、今は全く用ひられない語（名詞）をあげよ。

3　次の語句を說明せよ。

イ、五枚兜。下向。家子。見參。色代。配所。

ロ、形の如く。方便を作る。

4　文中の敬語の助動詞をあげて見よ。

5　次の言ひ方を口語にして見よ。

イ、東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひ難く。

ロ、いかゞ仰に從ひまゐらせでは候べき。

ハ、頼朝が弱げをまぼりたまふらん。

6　義經の、その日の裝束を言うて見よ。

7　釋義

【浮島が原】　ウキシマがハラ。靜岡縣（駿河國）駿東郡沼津町と富士郡鈴川との間に於て須戸沼、又の名浮島沼・富士沼・柏原沼を抱く平原。愛鷹（アシタカ）山の麓に

ある。古來原三十里といふのは、今の道程五六里にあたるから、富士川から黄瀬川までに當る。併し浮島の名を負ふのは主として彼の沼の邊である。砂土が海潮作用によつて移漂せられたもので、一帯の砂丘を以て駿河灣の風波を支へてゐる。壽永の昔、平維盛の軍が水鳥の羽音に驚いて潰走した所として名高い。

【九郎御曹司】　クラウオンザウシ。源九郎義經のこと。義經は義朝の末子。頼朝の異母弟。幼名は牛若丸。長じて源九郎判官といつた。

平治の亂、母常磐と共に捕へられたが、幼少の故を以て死を宥され、鞍馬山に入つて僧となつた。常に父母の恥を雪がうと志し、承安四年(一八三四)十六歳のとき陸奥に赴いて藤原秀衡に頼つた。治承四年(一八四〇)、兄頼朝の兵を擧ぐるや、馳せてその軍に加はり、木曾義仲を宇治・瀨多に破つてこれを滅し、又平氏を一の谷・屋島に破り、遂にこれを壇の浦に滅した。爾來功を恃んで軍事を專にし、屢〻頼朝の節度に背いたので、遂にその怒に觸れ、鎌倉に入ることを停められた。よつて腰越驛に留まり、情を陳じたが、許されなかつた。その後、頼朝の壓迫が愈〻加はつたので、大阪や京都に轉々したが、文治三年(一八四七)二月、遂に北陸道を經て陸奥に赴き、再び秀衡に投じた。秀衡はこれを衣川におき、待遇頗る力め、その卒するや、嫡子泰衡に遺命し、義經を推戴して大將軍となし、專ら國事を義經に聽かしめた。五年頼朝は密に泰衡をして義經を圖らしめた。泰衡は遂に父の遺命に叛き、兵を出して衣川を襲うた。義經は力戰苦鬪したが、衆寡敵せず、妻を刺して自刄した。年三十一。

後世義經の末路について異說を唱へるものがあつて、或は蝦夷に赴いたとなし、或は支那に逃れたといつて、成吉思汗(ジンギスカン)を彼に擬するものもあるが、いづれも確證はない。

「曹司」とは、部屋住の公達の稱。

保元物語、白河殿義朝夜討の條に「八郎御曹司の矢御覽候へ。」

【兵衞佐殿】　ヒャウエノスケドノ。「兵衞佐」は兵衞府の次官。

「兵衞府」は皇城の閤門を守護し、行幸の際供奉する武官の府。左右に分れ、その各〻に督(カミ)・佐(スケ)・尉(ジョウ)・志(サクヮン)の四等の官があつた。源頼朝ははじめ右兵衞佐であつた。こゝで兵衞佐殿、又後に佐殿とあるのは、皆源頼朝を指すのである。東鑑、卷一にも「前右兵衞佐頼朝」とある。

「源頼朝」は鎌倉幕府第一代の將軍。義朝の第三子。平治の亂のとき、年十三、父兄に從つて頗る戰功をあらはした。軍遂に敗れ、平宗清に捕へられたが、幸に池ノ禪尼の救解によつて死を免れ、伊豆の蛭ヶ島に流された。爾來警居二十餘年に及んだ。

治承四年(一八四〇)以仁王の令旨を奉じて、兵を擧げて伊豆を略したが、石橋山の戰に敗れて安房に逃れた。やがて再び勢を得て關東を服し、居を鎌倉に構へた。後、弟範頼・義經をつかはして義仲を誅し、尋いで平氏を一の谷・屋島に攻め、遂にこれを壇の浦に滅した。幾ばくもなく弟義經と隙を生じ、これを機として諸國に守護・地頭をおき、文治五年(一八四九)奥州に藤原泰衡を討滅して天下を統一した。建久元年(一八五〇)入京して權大納言に拜せられ、右近衞大將を兼ねたが、間もなく職を辭して鎌倉に歸つた。翌年前右大將家として諸役所をおき、幕府の職制を整へた。同三年征夷大將軍に任ぜられた。正治元年(一八五九)正月薨。年五十三。世に鎌倉殿又鎌倉右大將といふ。その墓は鎌倉町法華堂址の背後の丘陵にあつて、史蹟に指定されてゐる。

【陣】　ヂン。軍隊の屯するところ。兵營。陣屋。陣所。陣營。屯營。

史記の樊噲傳に「先登陷レ陣。」

江濃記に「備前方も川をしづ〳〵と越し、御會寺村に陣を移す。」

【白旗・白印】　シラハタ・シロジルシ。白い旗と白い色の徽號。共に源氏のしるしである。

「白印」は「白標」とも書く。白い色をもつて徽號とするもの。

保元物語、新院讃岐御遷幸の條に「しろじるし、あかじるしのつはもの」

【武者】　ムシャ。たゝかひをする人。つはもの。いくさびと。

平家物語、九、一二懸の條に「武者こそ二騎つゞきたれ。」

【覺束なし】　オボツカなし。(一)分明でない。(二)心もとない。こゝは(一)の意。

古今集、春上に「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」

【信濃の人々】　信濃に住んでゐるもろ〳〵の源氏たち。

「信濃」(シナノ)は東山道の一國。修して信州といふ。古は科野と書いた。中部地方の中央高地を占め、四周に山岳を環らし、飛騨・美濃・三河・遠江・駿河・甲斐・武藏・上野・越後・越中の十箇國に境を接してゐる。三市(長野・上田・松本)十六郡に分れ、長野縣の所管となつてゐる。

【木曾】　キソ。木曾義仲。源爲義の孫。義賢の子。頼朝には、從弟(イトコ)に當る。

二歳のとき、父義賢は惡源太義平に殺された。當時義仲も殺されようとしたが、畠山重能の情によつて免れ、齋藤實盛の乳母

の夫中原兼遠の手で木曾山中に養はれた。よつて木曾義仲と呼ぶに至つた。常に平家の繁榮を羨み、源氏の衰弊を歎いてゐたが、治承四年（一八四〇）以仁王の令旨を奉じて兵を起し、北陸道を徇へ、倶利加羅峠に平氏の大軍を破つて、頼朝の軍より先に京都に攻め上り、征夷大將軍に拜せられた。その勢が頗る盛であつたから、世に朝日將軍と稱せられた。然るに功を恃んで横暴の行が多かつたので、遂に後白河法皇の御憎しみをうけ、頼朝の二弟範頼・義經に討伐せられ、宇治・瀬多に敗れて近江の粟津に討死した。時に壽永三年（一八四四）、年三十一。

【甲斐の殿ばら】　甲斐國にある諸源の人々。武田信義その子信光などをいふ。

「甲斐」（カヒ）は東海道の一國。修して甲州といふ。富士山の北口に位し、東は相模・武藏、北は信濃、西は信濃・駿河、南は駿河と境を接してゐる。四境に峯巒をめぐらして地勢が峻嶮であるが、中央には甲州平原があつて、諸川がこれにあつまり、土地が肥沃で、農業が盛に行はれる。一市（甲府）九郡に分れ、全部山梨縣に管轄せられてゐる。

「武田信義」は鎌倉初世に於ける甲斐の武將。源義光の曾孫で、黒源太清光の長子。治承四年（一八四〇）以仁王の令旨を奉じて、子信光等と共に兵を擧げ、信濃の平氏を討ち、次いで黄瀬川で源頼朝に會し、平維盛と富士川を挾んで相對峙した。この時信義は夜間敵營を襲はうとして、水禽を驚かし、終に平氏を潰走せしめた。後、事を以て頼朝に斥けられた。文治二年（一八四六）卒。年五十九。

「殿ばら」は、(一)高貴の方々。(二)男子の敬稱。こゝは(二)の意。

宇津保物語、梅花笠に「舞人はとのばらの公達、殿上人」(一)

源平盛衰記、十八、文覺清水狀天神金に「殿ばらにも志をも申し、酒をも召させむ。」

【二陣】　ニノヂン。先陣の次にあるもの。第二番の陣。

源平盛衰記、二十七、墨俣川合戰に「一陣景家、二陣忠清、三陣盛俊、四陣長綱。」

太平記、一、頼員反忠の條に「先陣引けば、二陣喚いてかけ入る。」

【假名實名】　ケミャウジツミャウ。通稱と名乘。通稱は俗名。名乘は中古以後、男兒が元服する時、通稱の外に新につける名。義經について言つて見れば、九郎は假名、義經は實名である。

【家子】　イヘノコ。武門の庶子及び分家・一族をいふ。

東鑑、三、元暦元年九月十四日の條に「川越太郎重頼、息女上洛。爲レ相二嫁源廷尉一也。……重頼家ノ子二人、郎從三十餘輩從レ之。」

【郎等】　ラウドウ。わかもの。けらい。從者。郎從。郎黨。

朝野群載、二十二に「郎等之中、選二定清廉勇士一」

源氏物語、玉葛の卷に「はかゞしく身の助と思ふらうどうども、皆ゐて來にけり。」

【引具して】　ヒキグして、ひきつれて。ともなうて。

竹取物語に「中將、人々ひきぐして歸りまゐりて」

【鎌倉殿】　カマクラドノ。源頼朝の敬稱。前の「兵衞佐殿」の條參照。

【色白く尋常なるが】　顏の色が白くて、何となく氣品のあるものが。

「尋常」（ジンジャウ）は、(一)よのつね。あたりまへ。(二)目だたないで、何となく上品なこと。(三)殊勝なこと。(四)すぐれて立派なこと。こゝは(二)又は(四)の意。

古今著聞集、十二に「强盜の中に、ことなまやかにて、辭けはひよりはじめて、よに尋常なる男の」(二)

平家物語、十一、扇の的の條に「沖の方より尋常に飾りたる小船を一艘、汀へ向けて漕ぎ寄せさせ」(四)

【赤地の錦の直垂】　アカヂのニシキのヒタヽレ。赤地の錦でこしらへた鎧直垂。多く大將の着用するもの。

「鎧直垂」（ヨロヒヒタヽレ）は鎧の下に着る直垂。錦・練絹・生絹等で製し、裾と袖との端を括緒でくゝる。

「錦」（ニシキ）は數種の染絲で種々の模樣を染め出した地質の厚い絹布。

【紫裾濃】　ムラサキスソゴ。紫色で裾濃にしたもの。

「裾濃」は、染色の名。衣又は鎧の袖、草摺の縅の絲などを、同じ色で、上の方を淡く、裾の方を濃く染め出したもの。

源氏物語、澪標に「紫すそこのもとゆひ、なまめかしう」

平治物語、源氏勢汰の條に「紫すそこの鎧に、菊の筋金物打つたるに」

【裾金物】　スソカナモノ。鎧の草摺、又は袖の菱縫板の兩端と中と三所に打つた飾金物。又、冑の鍬（シコロ）の菱縫板にもつける。

參考保元物語、義朝白河殿夜討の條に「さかおもだかの鎧の、蝶の丸の裾金物しげく打つたる」

【白星】　シラホシ。兜の鉢に打つてある銀又は白鑞（シロ

メ）の鋲（ビャウ）。

保元物語、官軍方々手分の條に「上折したる烏帽子の上に、白星の冑を着」

【五枚兜】　ゴマイカブト。鍪（シコロ）の板の五枚ある兜。「鍪」は、錣とも書く。後衣（しりころも）の略。兜の鉢の左右及び後に垂れて頸を被ふもの。多くは撓革又は鐵板の反り曲つたものを絲又は革で綴ぢあはせて作る。その板數は四五枚を普通とするけれど、或は廣い一枚の板で作ることもあり、或は狹い板八九枚で作ることもある。

平治物語、源氏勢汰の條に「鍬形打つたる五枚兜の緒をしめ」

【鍬形】　クハガタ。兜の前立物の名。慈姑の葉を側面より見た狀のもの。二本相對して眉庇の上に立てる。

平家物語、七、實盛最期の條に「實盛は鍬形打つたる兜の緒をしめて」

【猪頭に着】　ヰクビにキ。兜などをあふのけに着けること。

平治物語、源氏勢汰の條に「白星の兜に鍬形打つたるを猪頸に着なし」

【大中黑の矢】　オホナカグロのヤ。切生（キリフ）の矢の一種。上下が白くて、中に黑い斑のあるもの。

「切生」は「切斑」とも書く。鷹などの羽の黑と白と斑の切れたものをいふ。

保元物語、義朝白河殿夜討の條に「二十四差したる大中黑の矢頭高に負ひなし」

【滋籐の弓】　シゲドウのユミ。「滋籐」は、重籐とも、繁籐とも書く。弓の幹を籐で繁く卷いたもの。雨露に逢つて鰾膠（ニベ）の離れるのを防ぎ、兼ねて裝飾のためにするもの。籐の卷樣、位置、幅、間隔等によつて、本滋籐・末（ウラ）滋籐・矢摺（ヤズリ）滋籐・鏑（カブラ）滋籐・中（ナカ）滋籐・吹寄（フキヨセ）滋籐・匂滋籐・段滋籐・節籠（フシゴメ）滋籐・千段滋籐・引兩（ヒキリャウ）滋籐・追（オヒ）滋籐・白（シラ）滋籐・村滋籐等の種類がある。

正式の滋籐は、弓の籐を目輪卷と星卷との間に三十六所卷き、纂目叩と月輪卷との間に二十八所卷いたものをいふ。

保元物語、義朝白河殿夜討の條に「四郎左衞門これを聞きも咎めず、……重籐の弓眞中とつて」

【太く逞し】　フトくタクマし。こゝは馬のふとく肥えて、勢のさかんなことにいふ。

源平盛衰記、三十四、東國兵馬汰の條に「黑栗毛の馬、高さは八寸、太く逞しきが」

【乘りたるが】　この「が」は、前の「色白く尋常なるが」の「が」と共に、主語をあらはす「が」であることに注意させたい。

【歩ませ出でて】　馬をあゆませて出て。

【童名】　ワラハナ。わらはのときの名。まだ元服せぬ前の名。をさな名。

榮華物語、月宴に「爲光の少將ときこえつるは、わらはの名はまちをさ君ときこえし。」

【近年】　高倉天皇の承安四年（一八三四）。義經時に十六歳。

【奥州】　アウシウ。陸奥國。又、道奥（ミチノク）につくる。奥羽地方の北端にある國。もと磐城・岩代・陸前・陸中の地をも含んだが、明治五年今の區域に分たれた。

義經が赴いた奥州といふは、陸中國の平泉で、當時陸奥出羽の押領使藤原秀衡の治所のあつた處。

【下向】　ゲカウ。都から鄙（ヒナ）へ赴くこと。

源平盛衰記、二、日向太郎通良首を懸くる條に「家貞西府に下向して」

【御謀叛】　コムホン。「謀叛」は「謀反」とも書く。君主に叛いて兵を起すこと。

こゝは當時の執政者に反對して兵を擧げることにいふ。

史記の高祖本紀に「人有上變事告楚王信謀反」

源平盛衰記、文覺頼朝に對面の條に「疾く〳〵謀叛を興し、平家をうちほろぼして、父の恥をも雪ぎ、又國の主ともなりたまへ。」

【夜を日に繼ぎて】　晝夜の別なく行ふこと。晝より夜にかけてなすこと。晝夜兼行。

孟子の離婁下に「仰而思之、夜以繼日。」

徒然草に「夜を日につぎて、この事かの事忘らず成じてむ」

【見參に入れてたび候へ】　お目にかゝらせて下さいませ。

「見參」(ゲンザン・ゲザン)は「見在參仕」の略。面會・對面等の敬語。
宇治拾遺物語、三に「たゞ今見參すべし、そなたにしばしおはせ。」
「たび」は「たまひ」に同じ。ば行四段活用。
【乳母子】　メノトゴ。乳母の子。乳兄弟。
源氏物語、推本の卷に「この人はかの大納言の御めのと子にて」
【佐藤三郎】　サトウサブラウ。名は繼信。陸奥の信夫の莊司元治の長子。忠信の兄。源義經の陸奥に來るや、弟と共にこれにつかへ、諸所の戰役に軍功を樹てて、鎌田盛政・同光政及び弟忠信と共にその四天王と稱せられた。文治二年(一八四六)二月屋島の役、平敎經の矢に當り、忠信に扶けられ、負はれて營に歸つたが、遂に義經の膝に凭つて落命した。年二十八。
【色代】　シキタイ。「色體」とも「式體」とも書く。挨拶すること。會釋すること。
平治物語、光賴卿の參内の條に「色代してしづ〳〵と歩み」

東鑑、三十四、仁治二年十一月二十七日の條に「前武州、不可然之旨、有御色代之故也。」
【善惡に騷がぬ人】　沈着で、事の善惡如何にかゝはらず、少しもあわてぬ人。
賴山陽はこれを評して、「深沈有大略、性堅忍、喜怒不形於色」と言つてゐる。
【同四郎】　佐藤三郎繼信の弟、四郎忠信。兄と共に義經の四天王の一人。文治元年(一八四五)賴朝が弟義經と隙を生じ、土佐坊昌俊をして義經を圖らしめたとき、忠信は力戰して之を破り、義經を奉じて吉野山に匿れ、伴つて源判官と稱して奮鬪し、義經の一命を救うた。翌文治二年京都で糟屋有季の兵に圍まれ、力鬪して自殺した。時に年二十六。
【伊勢三郎】　イセノサブラウ。名は義盛。伊勢國江ノ村の人。はじめ上野國荒蒔鄕で劫盜を事としてゐたが、義經のはじめて陸奥に赴いた途次、君臣の義を結んだ。後、義經の京都を逃るゝに及んで、再會を期して伊勢にかへり、守護首藤經俊を襲うて克たず、鈴鹿山に遁れて自殺した。

【八箇國】　ハッカクコ。坂東の八箇國、即ち箱根關以東の八箇國で、相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野をいふ。
【大名】　ダイミャウ。(一)平安朝の末、多くの名田を有したものの稱。(二)鎌倉時代に、將軍の家臣で、領地の大いなる守護・地頭に與へた稱號。(三)江戸時代、知行一萬石以上の武家の稱。こゝは(二)の意。
東鑑、三、壽永三年三月一日の條に「土佐國、大名國信・國光・助光入道等」
源平盛衰記、三十四、東國兵馬汰の條に「この馬をば大名小名八箇國のものども、内外につけて所望ありき。」
【小名】　セウミャウ。領地の小さい諸侯。小諸侯。
平家物語、八、征夷大將軍院宣の條に「一門の源氏、大名小名居ながれたり。」
【敷皮】　シキガハ。毛皮の敷物。地上に敷く。昔は將軍は虎豹の皮、彈正官は熊の皮、他は多く鹿の皮を用ひた。これに白毛(シラケ)・櫛上(クシカミ)・櫛形(クシガタ)等の名どころがある。
平治物語、信賴降參の條に「敷皮の上に引きすゑ」
平家物語、十二、六代御前の條に「千本松原といふところに御輿かきすゑさせ、若君下りさせ給へとて、敷皮しきて据ゑ奉る。」
【兜】　カブト。冑とも書く。古、戰爭のときかぶつて頭部をおほふもの。頂をおほふ部分を鉢といひ、その下に垂れて頸をおほふ部分を錏(シコロ)といふ。
和名抄、十三に「冑、賀布度、首鎧也。」
【辭退】　ジタイ。辭して引きさがること。謙遜して辭(イナ)むこと。
晉書の華譚傳に「實宜辭退。」
源平盛衰記、二十、八牧夜討の條に「武藏國秩父を憑みけれども、平家に恐れてこれを辭退す。」
【そのいろは知らねども】　佐殿(賴朝)の自分(義經)に對する樣子(氣持)のほどは、しかとわからぬけれども。
「色」は、樣子・きざし・兆候などの意。こゝは前に述べたやうに、氣持といふほどの意に見るべきであらう。

【心のゆく程泣きて】 氣のすむほど泣いて。滿足するほど泣いて。泣きたいだけ泣いて。

【頭の殿】 カウのトノ。「カミのトノ」の音便。頼朝・義經等の父なる左馬頭源義朝を敬つていふ。

「義朝」は爲義の長子。保元の亂、後白河天皇の御味方に加はり、父爲義、弟爲朝等が、崇德上皇の御味方として守護してゐた白河殿を夜襲して大勝した。後、藤原信西を除かうとして、平治元年(一八一九)、藤原信頼と相謀り、平清盛が熊野に赴いた不在に乘じて事を擧げ、上皇(後白河)・天皇(二條)を幽し奉り、信西を殺し、自ら播磨守となつた。間もなく平重盛に敗られて東國に奔り、尾張で舊臣長田忠致に殺された。年三十八。

【御行方】 オンユクヘ。頭殿の行かれたさき。

「行方」は、行くべき方向。行つた方。ゆくかた。

萬葉集、卷十五に「さ夜ふけて　行くへをしらに」

【池の尼の宥められしによりて云々】 「池の尼」は又池の禪尼ともいふ。藤原宗兼の女。平忠盛の後妻。清盛には繼母にあたる。平治の亂、頼朝が平宗清に捕へられたとき、宗清はその幼なるを憐み、池の尼を介して清盛にその助命を哀求した。頼朝は爲に赦さるゝを得た。日本外史には、この事を次のやうに書いてある。

> 頼盛將平宗清、亦捕義朝少子頼朝至、將斬。宗清憫之、因池尼請宥。池尼頼盛母、於清盛爲繼母。清盛不聽。尼怒曰、刑部卿(忠盛)而在、汝安得侮我言乎。重盛與頼盛固請。乃減死一等流于伊豆。

「宥む」(ナダむ)とは、宥恕を請ふこと。とりなすこと。調訂。

> 十訓抄、上に「その咎あまたゝびに及ばば、なだむるに力及ぶべからず。」
>
> 古今著聞集、九に「かたうど一人もなければ、申しなだむる者なし。」

【伊豆の配所】 伊豆の配流されたところ、卽ち蛭ケ島。

「伊豆」は東海道の一國。修して豆州といふ。本州中部の南東隅にある半島國で、北方は駿河・相模に接する。火山が多く、溫泉に富む。中にも熱海・伊東・修善寺は世に聞えてゐる。屬島に初島・神子元島並に伊豆七島がある。半島部は賀茂・田方二郡に分れて靜岡縣に屬し、伊豆七島は東京府に屬する。

「配所」(ハイシヨ)は、配流せられる所、流罪人のわびすまひする場所。謫所。

> 北史に「元坦配北州營死配所。」
>
> 續日本紀、神龜元年三月庚申の條に「定諸流配處遠近之程。」

「蛭ケ島」(ヒルガシマ)は伊豆國(靜岡縣)田方郡韮山町にある故蹟。往時狩野川はこの地を夾んで北流し、中洲を作つて島嶼をなしてゐたといふ。駿豆鐵道韮山驛から約一粁、源頼朝の配所として知られてゐる。

【伊東】 イトウ。伊東祐親。伊豆の伊東の豪族。河津二郎と稱し、剃髮して伊東入道と呼んだ。曾我兄弟には祖父にあたる。もと平氏に屬し、頼朝の伊豆に流されたときその監視を命ぜられた。已にして頼朝が入道の女と通じて一子千鶴御前を擧ぐるや、平氏の怒に觸れんことを恐れて、これを淵に投じ、頼朝を夜討にしようとした。頼朝はこれを悟り、去つて北條時政の許に走つた。治承年中、頼朝が兵を起し、關東の將士響の如くこれに應ずるや、入道は駿河に走らうとして果さず、壽永元年(一八四二)遂に捕へられて首を刎ねられた。

【北條】 ホウデウ。北條時政。伊豆北條の豪族。北條氏第一代の執權。頼朝の伊豆に流さるゝや、常にこれを庇護し、この女政子をこれに娶はせ、帷幄に參して功があつた。頼朝の鎌倉幕府を創立したその功の一半は時政の力であつた。建仁二年(一八六二)政所の別當となり、諸政を決した。後、外戚を以て事を用ひ、二代將軍頼家を弑し、畠山重忠を殺し、頼家の子公曉を使嗾して三代將軍實朝を弑せしめた。既にして女壻平賀朝雅を將軍にしようとしたが、事終に成らず、伊豆の北條に流され、建保三年(一八七五)その地に卒した。年七十八。

【安護】 シユゴ、まもること。警護。

> 晉書の孫綽傳に「所居齋前種二株松、恆自守護。」
>
> 平治物語、三條殿發向の條に「周防判官季實、近く候じて君をば守護し奉る。」

【心に任せぬ身】 心まかせにならぬ身。わがおもふやうにならぬからだ。

【かすかに】「幽かに」の字をあてる。しかと認めがたい程なるにいふ語。ほのかに。

【音信】オンシン。又、インシン。おとづれ。たより。

沈約の白銅鋺歌に「若欲(シヌベセント)寄二音信一漢水向(ヒテ)レ東流(ニレン)。」

【取敢へず】取るものも取りあへず。猶豫なく。たゞちに。早速に。すぐに。

源氏物語、須磨の卷に「高しほといふものになむ、とりあへず人そこなはるゝとは聞けど」

【かゝる大事】平家を討ちほろぼして父祖の恥をすゝがうといふ一大事をさす。

【八箇國の人々を始めとして候へども】「坂東八州の人々を始めとして、大勢の兵士がをるにはをるけれども」といふほどの意。

【一大事を申し合はする人もなし】「平家討伐のこの一大事を相談することの出來るやうな人はない」といふ意。

「申し合はする」は、いひあはせること、相談すること。

【頼朝が弱げをまぼりたまふらん】「わ(頼朝)が勢に、かりそめにも弱さうな樣子が見えたならば、直に裏切しようとして、絶えず目をつけて見張つてゐるであらう。」との意。

「弱げ」は、弱氣。弱さうな樣子。

源氏物語、夕顔の卷に「今なむ阿彌陀佛の御光も心淸く待たれ侍るべきなど聞えて、よわげに泣く。」

「まぼる」は「まもる」に同じ。見まもること。監守すること。じつと目を離さず見入ること。見張ること。

榮華物語、浦々別の條に「宮をもまぼらせたまふ。」

【夜もすがら】暮方から曉まで。夜とぼし。夜すがら。終夜。通夜。

履中紀に「通夜(ヨモスガラ)火不(ヒ)レ滅(エ)。」

土佐日記に「よもすがら雨やまず。」

【平家の討手上せばや】平家追討の軍を上洛させたいものである。

「討手」(ウッテ)は「ウチテ」の音便。もと賊軍・罪人などを追討する兵をいふ。

平家物語、十二、判官都落の條に「北條四郎時政に六萬餘騎をさしそへて討手にのぼせらる。」

「上せ」(ノボセ)は、都に上らせること。上洛させること。

「ばや」は、願望の意を示す助詞。

【東國おぼつかなし】東國が氣づかはしい。東國の事が心配になる。

「東國」(トウゴク)は近畿地方から東方諸國を指していふが、ここは主として坂東八箇國をさす。天武紀及び萬葉集によれば、東國と書いてアヅマとよんでゐる。然らば、天武天皇以前は、吾妻國と東國とは同意義に用ひられたものであらう。天武天皇以後、東海・東山兩道として區域の定つた後も、尙東國の稱は殘つてゐた。鎌倉時代以後に至つては、概して坂東卽ち狹義の關東を指して東國といつたやうに見える。それは玉葉集や吾妻鏡に、東國の武士を坂東武士とも關東武士とも稱したのでわかる。

「おぼつかなし」は、「覺束なし」の字をあてる。(一)分明ならぬこと。判然せぬこと。(二)心もとないこと。氣づかはしいこと。心の切なること。待遠なること。こゝは(二)の意。

【代官】ダイクヮン。或官職の名代。鎌倉・室町の兩時代には主君に代つてその事を勤める人をいふ。例へば執權・管領は將軍に代つて政務を專らにし、追討使は將軍に代つて臨時に軍政を行ふから、共にこれを代官又は御代官と稱した類である。その外、兩六波羅・九州の探題の如きも皆代官と稱した。後には專ら守護代・地頭代をいつた。江戸時代では、幕府の直轄地を支配する者の稱となつた。

平家物語、十二に「時政は鎌倉殿の御代官に、都の守護して候はれけるが」

【平家と一つになりて】平家の味方となつて。平家と一つ心になつて。

【御邊を待ちつけて候へば】「そなた(九郎義經)を待ちうけて、幸にその助を借りることが出來るやうになつたから。」といふほどの意。

「御邊」(ゴヘン)は同輩に用ひる對稱の代名詞。そこもと。そなた。

平治物語、信西出家由來の條に「御邊は諸道の才人かな。」

平家物語、一、鵜川合戰の條に「今度御邊をば一方の大將とたのむなり。」

「待ちつく」とは、待つて、その人又はその時に遭ふこと。待ちうけること。

枕草子、二に「驗者求むるに、…待ちどほに久しきを、からうじて待ちつけて」

宇治拾遺物語、一に「今日を待ちつけて、この人をかく責めければ」

【故左馬頭殿】　コサマノカミドノ、今は故人になつてゐたまふ左馬頭殿、卽ち頼朝等の父義朝をさしていふ。なほ前項「頭殿」を見よ。

「左馬頭」は左馬寮の長官。左馬寮は右馬寮と共に、宮中「馬寮」（メレウ）の一。御牧及び諸國の牧場より貢する官馬の調習・飼養及び供御の乘具若しくは飼部の戸口・名籍等を掌るところ。頭・助・大少允・大少屬・馬醫・馬部・使部・直丁・飼丁等をおく。

【よみがへらせたまふ】　よみ（黄泉）よりかへらせたまふ義。「いきかへられた。」「蘇生せられた」などの意。

【祖先】　ソセン。とほつおや。先祖。

參同契に「子繼二父業一孫紹二祖先一。」

【八幡殿】　ハチマンドノ。八幡太郎源義家を指す。義家は頼義の長子。小字は源太。七歳の時京都石清水八幡宮の神前で元服したので、世に八幡太郎といつた。

人となり勇武絶倫、最も騎射をよくした。前九年の役、父頼義に從つて安倍貞任を陸奥に擊ち、康平五年（一七二二）衣川關を陷れて貞任を得た。翌六年功を以て從五位下出羽守に任ぜられた。一旦惑ずるところあり、大江匡房に兵法を學んだ。永保三年（一七四三）陸奥守となり、鎭守府將軍を兼ねた。偶〻後三年の役が起つた。乃ち弟新羅三郎義光の援を得てこれを討平した。役後私財を投じて將士に酬い、東國武士の心を集めた。それより東國の守・介を經て伊豫守に至つた。天仁元年（一七六八）薨。年六十八。

大正四年十一月、正三位を追贈せられた。

義家—義親—爲義—義朝—頼朝
　　└義經

【後三年の合戰】　ゴサンネンのカッセン。前九年の役後、清原武則の孫眞衡がその一族なる武衡・家衡等と鬪つて奥羽が再び亂れたとき、陸奥守源義家が、眞衡を援けて武衡・家衡等を金澤柵に圍み、苦戰の後、弟義光の來援を得て、堀川天皇の寛治元年（一七四七）遂に奥羽を平定するに至つた戰役をいふ。この戰は前後三年にわたつた。よつて「前九年の合戰」に對して、かやうにいふ。

【むなうの城】　所在不明。

【栗屋川】　クリヤガハ。厨川とも書く。陸中國（岩手縣）岩手郡厨川村。盛岡市の西郊で、北上川に臨んでゐる。前九年の役、安倍貞任はこの地の厨川柵に據り、厨川次郎と稱して寄手を惱ましたが、康平五年（一七二二）源頼義・清原武則に圍まれて誅に伏した。

【はた】　端。（一）はし。へり。ふち。ほとり。（二）わき。ほか。かたはら。こゝは（一）の意で、「ほとり」といふほどの義。

【おし下りて】　下つて。おりたつて。「おし」は接頭語。

【幣帛】　ヘイハク。神に奉獻するもの。にぎて。ぬさ。みてぐら。上古は木綿や麻をそのまゝ用ひたが、後世は織つた布・帛を用ひた。旅行の折などには種々の紙又は帛を細かに切つてぬさ袋に入れ、道のほとりの神に奉るを例とした。

神祇令に「凡供二祭祀一幣帛、飲食及菓實之屬」

源平盛衰記、九、堂衆の軍の條に「社頭は死骸に汚されて神供備ふる人もなく、在家は親子に別るれば、幣帛捧ぐる者もなし。」

【南無】　ナム。Namah, Namo, 譯して歸命・敬禮・歸敬。佛にむかつて歸依・信順する時用ひる語。なも。

榮華物語、玉臺に「南無四十八願彌陀如來、南無因圓果滿彌陀如來。」

謠曲、實盛に「南無といつぱ、卽ちこれ歸命。」

【御擁護をあらためず】　「前と同じやうに御擁護をお垂れ下さつて」といふほどの意。

「擁護」（ヨウゴ）は、たすけまもること。かばひまもること。

漢書の陳湯傳に「怨漢擁二護呼韓邪一而不助レ己。」

【祈誓】　キセイ。神佛に祈つて誓を立てること。立願。

保元物語、法皇熊野御參詣の條に「古老の山伏八十餘人、般若妙典を讀誦して、祈誓やゝ久し。」

【感應】　カンオウ。通常「カンノウ」と發音する。こゝは信心の程の神佛に通じること。感通。

平家物語、十、熊野參詣の條に「一乘修行の岸には、感應の月隈もなく」

【刑部丞】　ギャウブノジョウ。こゝは義家の弟刑部丞義光をさす。

「刑部丞」は刑部省の第三等官。「刑部省」は古昔の八省の一。審判所罰のこと一切を掌つた官署。後その實權は檢非違使に移つて、唯僧尼の破戒、官人の犯罪によつて流刑に陷るものの贖銅のみを掌るに至つた。その長官を卿といひ、下に輔・丞・錄等の職員があつた。

「義光」は頼義の第三子。近江國新羅明神の社前で元服したので新羅三郎と稱し、又館(タテ)三郎といつた。幼にして弓馬をよくし、長ずるに及んで驍勇、智謀があつた。はじめ左兵衛尉となつて京都宿衛の任にあつた。後三年の役、兄義家の軍が利を失つたと聞き、赴き援けたいと願ひ出でたが、許されなかつたので、寛治元年(一七四七)遂に官を辭して陸奥に赴いた。義家はこれに力を得て、遂に戰に勝つことが出來た。後、兄に從つて京都に歸り、尋いで刑部丞となり、進んで刑部少輔に至り、大治二年(一七八七)卒した。

義光は音律を好んで、その精妙を極め、笙の師豐原時元から笙の名器交丸を傳へられた。東征の砌、相模の足柄山で、月明の夜、時元の子時秋に笙の祕曲を傳へたといはれてゐる。

【内裏】　ダイリ。天子の住ませたまふ宮殿。おほうち。禁裏。御所。皇居。禁廷。禁中。禁闕。九重。

源氏物語、明石の卷に「かゝるついでに、内裏に奏すべき事によりてなむ、いそぎのぼりぬる。」

【魚と水との如くにて】　魚は水があつて生を保つ。それゆゑ、兩者の關係の親密で、相倚賴することにたとへる。

三國志の諸葛亮傳に「先主(劉備)與二諸葛亮一計レ事善レ之、情好日密。關羽・張飛等不レ悅。先主曰、孤之有二孔明一、猶二魚之有レ水。願勿二復言一。」

世に「水魚の交」といふのは、この故事から出た語である。

【先祖の恥を雪ぎ云々】　祖父爲義は保元の亂に、父義朝は平治の亂に、何れも平家に敗れて死んだ。よつて平家を滅してその恥を雪ぎ、亡靈の悲憤を休めまゐらせたいとの意。

「雪ぐ」(ス、ぐ)とは、水で汚を洗ひきよめること。こゝは、わが家、わが父祖のうけた恥を洗ひ去ることにいふ。そゝぐ。

「亡魂」(バウコン)とは、亡き人のたましひ。亡靈。

後漢書の段潁傳に「洗二雪百年之逋負一、以慰二忠將之亡魂一。」

源平盛衰記、二十六、伊勢國へ、飛脚を遣はす條に「西寂を生虜り、…磔にして、父通清が亡魂に祭りたり。」

「憤」(イキドホリ)は、(一)歎き憂へること。心の不平なること。(二)いかること。悲憤・憤慨などと熟する。こゝは(二)の意。

古今著聞集、五に「惡しくふるまひけるによりて、後白河院御いきどほり深かりければ」

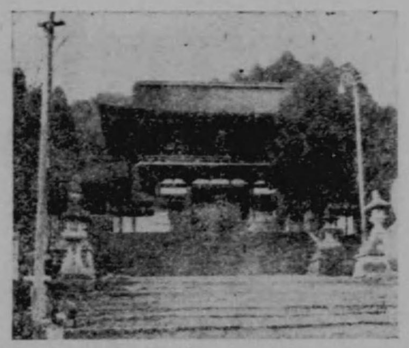
【山科】　ヤマシナ。もとの山城國宇治郡山科。今の京都市東山區山科。いはゆる山科盆地で、南方のみ山城盆地につゞく。天智天皇の山科御陵、東本願寺の山科御坊、安祥寺、毘沙門堂、坂上田村麿の墓、大石良雄隱宅の址、日ノ岡等の舊蹟がある。

義經記卷一、常磐都落の條に、

牛若は四つの年まで母のもとにありけるが、心ざま・振舞人にすぐれしかば、清盛常に心をかけて宣ひけるは、敵の子を一所に育てては、いかゞあるべきと思し召しければ、京より東、山科といふところに源氏相傳の侍の遁世して、かすかなる住居にてありける所に、七年まで育て給ひけり。

と見えてゐる。

【鞍馬】　クラマ。鞍馬寺。京都府愛宕(オタギ)郡鞍馬山の中腹にある名刹。山號は松尾山。もと法相宗。寶龜元年(一四三〇)鑑眞和尚の高足鑑禎の開基。延曆年中藤原伊勢人が堂舍を建立した。後、勅願寺に列した。中世に至つて一時衰頽したが、寛平年中、東寺の峯延がこれを再興し、天永年間延曆寺の忠尋が改めて天台宗に轉じた。大治以來屢〻火災に逢つた。今の本堂は明治五年の再建にかゝる。寺境幽邃、古來福德の佛として世人の崇敬が極めて篤い。



本堂から不動堂を經て、北西一粁餘に僧正ヶ谷といふがある。こゝの魔王堂は俗に鞍馬天狗太郎坊の栖居で、源義經が少年時代登つて劍を學んだところだといふ。

【形の如く】　カタのゴトく。形式のとほり。慣例に從つて。きまりのとほりに。

【内々平家方便を作る】　平家がひそかに様々の手段を運らして義經を失はうとはかることをいふ。

「方便」（ハウベン）は、(一)その道に導くための便宜の手段。(二)目的のために利用せられる一時の手段。てだて。たばかり。こゝは(二)の意。

晉書の石季龍載記に「軍中有二勇悍策略一與レ已伴者、輒方便害レ之。」

狂言、布施ないに「十疋の布施物……方便のもつて取らう。」

【秀衡】　ヒデヒラ。藤原氏。平安朝末期の奥州の豪族。陸奥出羽押領使基衡の子。度量が大きくて沈毅であつた。嘉應二年（一八三〇）鎮守府將軍となり、養和元年（一八四一）陸奥守に拜せられた。平宗盛は嘗て秀衡の兵を借りて源頼朝を伐たうとしたが、秀衡はこれに應じなかつた。平家滅亡の後頼朝と交を修めた。始め源義經は秀衡に身を寄せたが、後頼朝と仲違して再びその身を寄せた時も、これを衣川の館に留めて、厚く庇護した。文治三年（一八七四）卒した。

義經がはじめ陸奥に赴いて藤原秀衡に依つたのは高倉天皇の承安四年（一八三四）で、丁度十六歳のときであつた。

【いかゞ仰に從ひまゐらせでは候ふべき】　反語。「どうして仰に從ひますまいか、きつと仰に從ひます。」といふほどの意。

【さてこそこの御曹司を大將軍にて】　「さういふわけであつたればこそ、この御曹司を大將軍として、平家追討のために都へおのぼせになつた次第である。」といふほどの意。

8　挿　圖

頼朝義經の對面。

正面上段なるは頼朝、その左、敷皮の上にすわつてゐるのは義經、下方、右側の僧形の一人物は辨慶、その左なるは義經の從臣の他の一人物、左方にゐる三人は恐らく堀彌太郎等頼朝の從臣どもであらう。畫風の素朴掬すべきところある點に目を留めさせたい。

二四　鵜　越

1　解　題

源平盛衰記第三十七「義經鵜越を落す並畠山馬を荷ふ附馬の因緣の事」を採つた。

「源平盛衰記」（ケンペイセイスヰキ）は四十八巻。今その梗概を左に記すこととする。

(1)　作者。不明。果して一人の人が全部をかき上げたか否か、そこから問題にしてこなくてはならぬ。古くは葉室時長といはれてゐるが、確かな證據があるわけではない。

(2)　時代　隨つて不明。

(3)　平家物語との關係　その題材や記事の順序は殆ど同一であつて、たゞ繁簡の差があるのみなので、兩者の先後の關係がむづかしく、且興味のある問題となつてゐる。一說には平家物語は保元物語や平治物語のやうに三巻であつたのが、流布本平家物語の十二巻となり、長門本平家物語の二十巻となり、更に盛衰記のやうに四十八巻にまで成長發達したのであると考へられてゐる。成程三―一二―四八は妙に工合のよい數字を示してゐるし、戰記文學は社會的民衆的に成長發達して行くものだといふ考に照り合はせて見ると首肯される。然し藤岡博士・野村博士は平家物語の方が盛衰記を抄約したものであると考へてゐる。

思ふに、記事の繁簡といふうちにも、簡單な記事でちやんと獨立してをればともかく、平家物語は盛衰記をもつて補はねばどうしても意味を捕捉することのできない、つまり抄約したといふ痕跡のあり〳〵と見えるものがあるのである。又繁簡といふ内にも、盛衰記は記述的であつて文飾があるが、平家物語には舞臺的なところがあるので、兩書は成立の動機がちがふのではあるまいか。即ち語り物としての平家を豫想することができるのである。同時に盛衰記はその名の示すが如く源平の盛衰を主題としたものであるが、平家の方はその主題を局限したところに一層文學的要素が多いのではないかと考へられる。

(4)　記事の本末

巻　一、　平家繁昌并得長壽院の導師の事―」平家に似る

巻四八　女院六道回物語の事

(5)　諸本

黒川眞道藏本
御　物　本　寫本
中御門宣衡本（參考本）
松井簡治藏本

古　活　字　本
片假名整版本　版本
繪　入　版　本

帝國文庫本
國民文庫本　活版本
通俗日本全史本

2　編纂の用意

前課「浮島が原」に關聯させて「源平盛衰記」所載、源平一の谷合戰に於ける鵯越の逆落しの一節を讀ましめ。軍將義經の花々しい武者振、佐原義連の雄々しい先陣、畠山重忠の雙びない怪力及びこの愛馬をいつくしむ眞情等に感興を催さしめたい。同時に、五大戰記物語（保元・平治・平家・盛衰記・太平記）の一なる盛衰記讀解の力を養はしめたい。

3　要　旨

一の谷合戰に於ける鵯越の逆落しと平家潰滅の光景との描寫である。先づ鵯越に軍を進める途中の有樣を敍し、次にその險を逆落しにする義經の軍兵の勞苦と活動とを子細に描いてゐる。卽ち眼に映じて來るものは地形の天險と軍兵の活劇とで、特殊なその舞臺とその舞臺の上に非常に花々しい進軍を敢行し、遂に平家一門を潰滅に陷らしめる光景とが、本文に於ける味はひどころである。敍事的には、義經の用意と、佐原義連の先陣と、畠山重忠の無雙の振舞とが中心興味である。

4　概　說

第一節（一六二頁――一六三頁一行）　壽永三年二月七日の曉、義經の一行が鵯越に向ふこと。途中、平家の雜兵を血祭にする。

第二節（一六三頁二行――八行）　一の谷の崖上に立つて敵の陣屋を望む。一行にやゝ躊躇の色が見える。

第三節（一六三頁九行――一六五頁二行）　戰機將に到來せりとなし、追手に力を合はせんとて、崖を下らんとし、占ひの馬を下す。

第四節（一六五頁三行――一六六頁二行）　義經の先頭にて崖を壇の上まで出て留る。

第五節（一六六頁三行――一六七頁三行）　佐原義連、先づ馬を下す。義經以下これにつゞく。

第六節（一六七頁四行――一六八頁六行）　畠山重忠、馬を負うて下る。士氣をはげます。一同下る。

第七節（一六八頁七行――一六九頁五行）　平家の狼狽。

第八節（一六九頁六行――）　平家の潰滅。痛ましき最期。

5　取扱上の注意

客觀的に情勢の變化を敍述してゆくといふ書き方で、この種の文學に缺くべからざる作者の主觀・感情の强くあらはれてゐないのは聊か物足りない感がある。卽ち讀後の感が平板に失する點である。全體の構想からいふと佐原・畠山を骨格とし、壇の上に進退谷つたことを中心とし、文辭的な對句の進行曲をもつて血肉としてゐる。對句は軍記物の特有であるが、その氣持は文の流轉をうる點と、距離をおいて眺めるに似た朗らかさとである。

◆鵯越といへば、古來、一つの話題にも畫題にもされるほどに有名である。國文學特に戰爭文學上のみの話題でなく、日本國民としての常識であるとも謂はれよう。むづかしい文學論や、これが事實としての穿鑿などは大抵にして、敍述された通りに讀んで行くがよいと思ふ。

◆單記物として、辭樣の上にも、かなり學ばしめる個處が多い。その方面の扱ひをおろそかにしてはならない。

6　設　問

1　次の語句は、どういふ意味か。

イ、矢合はせ時。引懸け〳〵打ちけるに。下知。楯を並べ突き。大手（追手）。辰の半ば。

ロ、……傍輩に見落されじと思ふには、これに劣る處やある。

ハ、かゝる振舞人倫にはあらず。

ニ、無慚といふもおろかなり。

2　この文で最もあざやかに描かれてゐる人物は誰か。

3　こゝに描かれた人物の特徵について語つて見よ。

4　義經の人物は、どういふ風にあらはれてゐるか。

5　觀察が行きとゞき、敍し方の細かいと思はれる點を

あげて見よ。

7　釋　義

【鵯越】　ヒヨドリゴエ。神戸市の北方夢野から北西にむかつて登る山徑。源平一の谷合戰のとき、源義經の逆落しによつて有名である。山路はやゝ急峻であるが、源平盛衰記・平家物語に傳へるほど急峻ではない。別に一の谷の後方、俗稱内裏跡と鐵枴峯との間の急坂をこれに擬する說もあるが、確證はない。

【同じき七日】　第八十一代安德天皇の壽永三年（一八四四）二月七日。

【九郎義經】　前課「浮島が原」の釋義中に見えてゐる「九郎御曹司」參照。

【鷲尾】　ワシヲ。鷲尾三郎經春。「鷲尾」とは、その居所の山の鼻が鷲に似てゐた爲につけた姓である。「三郎」は三男、「經春」の「經」は「義經」の「經」、「春」は父の名の一字を取つたのだといふ。義經が一の谷討伐のため、三草山の奥に入つたとき、辨慶が道案内にとて連れて來たもの。生年十七。これより義經の家來となり、奥州までも伴をした。

平家物語には、「年は十八、鷲尾庄司武久の子、義久と名のる。」と記してある。

【先陣】　センヂン。(一)本陣の前にある隊伍。さきぞなへ。さきて。先鋒。(二)さきがけ。先登。こゝは(二)の意。

源平盛衰記、十五、宇治川合戰の條に「唯今宇治川の先陣渡せるは、昔朱雀院の御宇、承平に將門を討ち、勸賞に預りし下野の國の住人俵藤太秀郷が五代の苗裔、足代太郎俊綱が子に又太郎忠綱、生年十七歳」

【一の谷】　イチのタニ。兵庫縣神戸市須磨の西方にある地。鐵枴・鉢伏の兩山が明石海岸に迫つた處で、僅に一路が東西に通じてゐる。元曆元年（一八四四）、源範頼・同義經が平家の大軍を破つた古戰場として知られてゐる。

【二月の初】　キサラギのハジメ。壽永三年（一八四四）二月七日。この日矢合はせと豫て定つてゐたので、義經の軍は前日山のうしろをまはつて、いよ〳〵鵯越にさしかかつたのである。

【霞の衣たちへだて……あやまたる】　この一句は七五調にたつてゐることに注意させたい。

「霞の衣」は、山にかゝる霞を衣に見たてた語。

古今集、春上に「春のきる霞の衣ぬきを薄み山風にこそ亂るべらなれ」

「たちへだて」の「たち」は衣をたつ（裁ち）に「立ち隔ての「たち」をかけたもの。「へだて」は霞が山をへだて、これが爲に山が遠く見えるさまをいふ。

「綠を添ふる山の端」は、春がやゝ萌して、草木が次第に綠を加へる山のはし。

「白雲絶え〴〵聳えつゝ」は、白雲がきれ〴〵に山上にかかること。

高い山の上にかゝるから、「聳えつゝ」といつたのである。

「先づ咲く花」は、春にさきがけて咲く梅の花。

風雅集、春上、春の歌の中に、皇太后宮大夫俊成「梅が枝にまづ咲く花ぞ春の色を身にしめそむる始なりける」

【未だ歩みなれぬ山路なり云々】　五七調のくづしである。

未だ歩み　なれぬ山路なり
行末は　そこと知らねども
征く馬の　心に任せつゝ
各〻先にと　進みけり

【征く馬】　ユくウマ。旅に乘りゆく馬。又、征途にある馬。征馬。

朗詠に「行人征馬、駱驛於翠簾之下。」

源平盛衰記、四十一、實平西海より飛脚を遣はす條に「夜の月明々として、水に移る影鎧の袖を照らしけり。同じく征馬の旅なれども、殊に興ありてぞ覺えける。」

【仄暗き程】　ほんのりと暗いころ。うすぐらい頃。

「仄暗し」は、淸んでホノクラシとも、濁つてホノグラシともいふ。うすぐらいこと。

源氏物語、末摘花の巻に「まだほのぐらけれど」
蟬丸、一に「かげろふの森ぐらし、淺くな明けそ朝日山。」

【道には泥みけれども】 道には行きなやんだけれども。

「泥む」(ナヅむ)は、(一)はか〳〵しく進行せぬこと。行きなやむこと。わづらひとゞこほること。(二)なやみわづらふこと。(三)かゝはること。拘泥。(四)一筋に思ひ寄ること。うちこむこと。執心。こゝは(一)の意。

【矢合はせ時】 敵味方互に矢合はせをする時。

「矢合はせ」とは、一騎討の前に先づ矢を射合ふことをいふ。多く鏑矢（カブラヤ）を射る。

東鑑、一、治承四年十月十八日の條に「以三來二十四日一被レ定二矢合之期一。」
保元物語、白河殿義朝夜討の條に「矢合はせに郎等を射させて」

【引懸け〳〵打ちけるに】 悪所をいとはず、しきりに馬をかけさせたところが。

「引懸け」は「引驅け」の意。馬を馳せて進ませること。角（カク）を入れて馬を早めること。

平治物語、早馬立の條に「引驅け〳〵打つ程に」
「打つ」とは、騎馬で行くこと。
太平記、三、主上御夢の條に「多勢百騎とも二百騎とも打たせたる大名は一人も參らず。」

【篠が谷】 シノがヤ。

【名乗る】 ナノる。わが名を告げること。

源氏物語、東屋の巻に「宮のさぶらひに、たひらのしげつねとなむ名乗り侍りつる。」

【散々に】 サン〳〵に。むやみやたらに。めつたむしやうに。

「散々」は、(一)殘るところなきさま。極度に及ぶさま。したゝか。はなはだしく。(二)甚だ見苦しいさま。樣子のわるいさま。不幸などに出逢つたさま。こゝは(一)の意。
保元物語、官軍方々手分の條に「弓取りなほして、散々に射るに」

【此奴ばら】 コヤツばら。こいつども。こいつら。

「此奴」は「コノヤツ」の略。人をいやしめていふ語。
「ばら」は複數を示す接尾語。「殿ばら」の「ばら」と同じ。

【雜兵】 ザフヒャウ。名もなき侍。あをばもの。さつぺい。さつぴやう。

明德記に「雜兵の手にかゝり、若し犬死もやせむずらむ。」
曾我物語、一、杵臼、程嬰の條に「われ自害の後、ざふひやうの手にかゝりて命を空しうせんこと口惜しければ」

【搦め捕つて】 カラめトつて。しばりとらへて。

「搦む」とは、捕へてしばること。捕縛。

伊勢物語に「盜人なりければ、國の守に搦められにけり。」

【軍神】 イクサガミ。戰の勝利を祈る神。經津主神及び武甕槌神。兵家では北斗星。その第七に破軍星があるからである。ぐんしん。

參考保元物語、白河殿夜討の條に「軍神に祭らんとて、暫く弓を引き持ち、表に進みたる伊藤六が眞中におしあて發ちたり。」

【尋承】 ジンジ・ウ。案内。道しるべ。この語は源平盛衰記の特有語らしく思はれる。

同書、三十三、兼康倉光を討つ條に「遁れ難き命を生き、剩へ西國の尋承を給はり、故郷に歸つて再び妻子を相見ん事も御恩とのみ思ひ奉る。」
同、四十二、親家屋島尋承の條に「親家を西國の案内者に憑む。屋島の尋承せよ。」

【辰の半ば】 辰の刻のなかばごろ。今の午前九時頃。

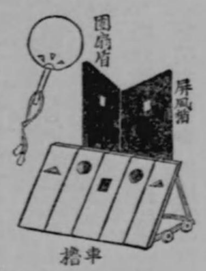
子　午後一二時　丑　午前二時
寅　四時　卯　六時
辰　八時　巳　十時
午　十二時　未　午後二時
申　四時　酉　六時
戌　八時　亥　十時

【鉢伏】 〔磯の途〕ハチブセ、イソのミチ。

【軍陣】 グンヂン。戰爭の陣立。軍隊。

史記の李將軍傳に「與レ人居則畫レ地爲二軍陣一。」
源平盛衰記、二十二、衣笠合戰の條に「軍陣に酒を送るは法なり、戰場に酒を請くるは禮なり。」

【楯】 タテ。盾とも干とも書く。戰陣で身を蔽ひ、敵の矢丸を防ぐに用ひる具。又儀仗にも用ひる。鐵製もあるが、多くは、楠・榎などの厚板で作る。長さ四五尺、幅二三尺。一枚なものもあり、四五枚續きなのもある。古



製のものは長大で、間々革を縫合はせて張る。その質・形狀・用法によつて、白楯・皮楯・鐵楯・大楯・小楯・箱楯・車楯・帖楯・屏風楯・鎖楯・持楯・掻楯等の種類がある。

【矢束をくつろげたり】「身をくつろげるやうな心持で、樂に矢を持つてゐる。」といふほどの意。

「矢束」(ヤツカ)は、矢の長さ。一束は一握り即ち四指をならべた幅の長さ。矢はこれを基本としてその長さをはかるよりいふ。但しこゝでは、それより轉じて矢そのものをいつたやうに見える。

今昔物語、二十五に「弓を箭つかの有るかぎり引き給ひて、箭を放ちたれば」

平家物語、十一、遠矢の事の條に「矢束も少し短う候へば」

〔前は海、後は山云々〕

右は明石

月の光

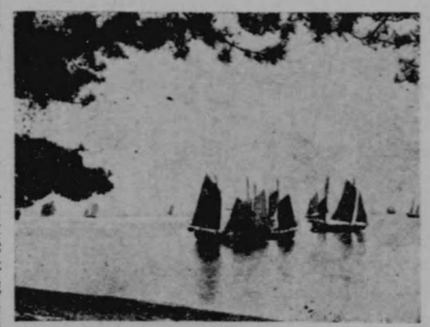
波も嵐も音あはせ

前は海　↑後は山

もゆらんな優

左は須磨

【須磨】スマ。攝津の名所。今は神戸市の一區。市の南西隅を占めてゐる。その海濱を須磨の浦といふ。ここは白砂青松の勝地で、近く淡路島を望み、風光が極めて優麗である。主として住宅地であるが、又須磨寺・一の谷等の史蹟に富んでゐる。面積二五方粁。人口八萬二千。



【明石】アカシ。兵庫縣播磨國の一市。播磨海岸の東端に位し、明石海峽を隔てて淡路島に對してゐる。舊松平氏八萬石の城下で、中國街道の要衝に當つてゐる。附近の海岸は謂はゆる明石浦で、舞子・須磨と共に白砂青松の勝地として知られてゐる。物産には明石縮(チヾミ)・明石燒がある。市の後丘に柿本人麿を祀つた柿本神社(一に人丸神社)がある。人口三萬八千。

【月の光も優ならん】月の光もさぞかし美しいことであらう。

「優」(イウ)は、やさしくしとやかなこと。品のよいこと。すぐれて美しいこと。優美。優麗。

源氏物語、若菜の卷、下に「いとよく物に響きあひて、優に鳴りける琴の音かな。」

【追手】オフテ。又大手とも書く。(一)軍陣の名。敵の前面を攻擊する隊。「搦手」(即ち後面を攻擊する隊)に對する名。(二)城郭の前面の稱。その後面を「搦手」といふに對する語。こゝは(一)の意。

源平盛衰記、三十六、平家手向を嫌ふ條に「源氏の大手は昆陽野に陣を取りて遠火を燒く。」

東鑑、一、治承四年八月二十六日の條に「引二籠于當所衣笠城一各張レ陣、東木戸口大手云々」

【半ばと見えたり】今や、合戰の半ばと見えた。今や合戰のまつさいちゆうと見えた。

【喚き叫ぶ聲云々】文脈は次のとほり。

喚き叫ぶ聲
射違ふ鏑の音　山を穿ち、谷を響かし云々

「喚き叫ぶ」(ヲメきサケぶ)とは、大聲を立てて呼び立てること。わめくこと。叫喚。

宇治拾遺物語、二に「ひはぎありて人殺すやとをめく。」

「射違ふ」とは、敵味方互に弓を射はなつこと。

「鏑」(カブラ)は、角又は木で作り、球狀で中を空にし、數箇の穴を穿つ。これをつけたものを鏑矢といふ。矢がらは白箆を用ひ、普通の矢よりも太く長く、矢束卷をする。羽は四立に作り、鏑の先に雁股(カリマタ)のやじりをつける。これを射れば鏑の穴で風を切つて鳴る。主として戰のはじめに射る。

保元物語、白河殿攻落の條に「目九つ差したる鏑の、目柱には角をたて、風返し厚くつくらせて」

【赤符】 アカジルシ。赤地の布帛でこしらへたしるしばた。

「しるしばた」とは、古、大將などの背に負うてしるしとした小形の旗。紋所を入れてあつたと思はれる。

【劫火】 ゴフクヮ。劫末卽ちこの世界が滅亡するときに起るといふ三災の一。

災には大小の二つある。

(一)、三小災　一住劫（成劫・住劫・壞劫・空劫などともいふ）の中には二十增減劫（二十小劫）がある。その減劫に起る三つの災、これを小三災といふ。卽ち左の通り。

(イ)刀兵災　(ロ)疾疫災　(ハ)飢饉災

(二)、三大災　住劫を過ぎると壞劫に入る。壞劫に二十增減がある。はじめの十九增減劫に有情世界が破壞し、最後の一增減劫に世界が破壞する。その時におこる災害に左の三つがある。これを三大災といふ。

(イ)火災　七つの太陽が出て、下は無間地獄から上は初禪天までを燒きつくす。

(ロ)水災

(ハ)風災

その輪轉は左式のとほり。

7火災＋1水災＝8災　　8災×7＝56災（七回反復）

56災＋7火災＝63災　　63災＋1風災＝64災＝64大劫

【かくやと覺えたり】 「かくや」の下に「あらん」の語を補つて文を解せしめたい。

【時已によくなりたり】 頃が已に熟した。戰機が、もはや熟した。

【七八段】 シチハッタン。段は反とも書く。一段は古昔六間の稱。こゝもその意と見てよからう。

宇治拾遺物語、二に「二三段ばかり投げられて倒れ伏しにけり。」

平家物語、十一、那須與一扇の要を射る條に「海の中一たんばかり打ち入れたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもありつらんとこそ見えたりけれ。」

【白砂】 シラス。「白洲」に同じ。白い砂の洲。

新勅撰集、多に「友千鳥群れてなぎさに渡るなり沖のしらすに潮やみつらむ」

太平記、二十九、小淸水合戰の條に「武者一騎、馬を白砂に馳せたふして、敵七騎に取りこめられたり。」

【徒步】 カチ。馬・車その他乘物なくして步むこと。步行。

【さればとてさてあるべき事ならねば】 「さうかといつて、そんなにぐづ〳〵してゐてすむことでもないから。」といふほどの意。

【大鹿毛】 オホカゲ。大きな鹿毛の馬。奥州產の名馬で、嘗て藤原秀衡から義經に贈つたもの。

「鹿毛」は馬の毛色の名。體毛が褐色で、鬣・尾・膝以下の黑色なるもの。黑鹿毛・白鹿毛等の種類がある。

顯季集に「筑紫へ下らんとせしに、永緣僧都がげなる馬をおこせて」

【佐藤三郎兵衞】 サトウサブラウベエ。前課「浮島が原」の釋義中に見えてゐる「佐藤三郎」に同じ。その項參照。

【大夫】 タイフ。「タユウ」と發音する。黑い馬。白覆輪の鞍をおいた。今度の出陣に兄賴朝から貰つたもの。もとの名を薄墨といふ。義經は崖の上まで出る間は大鹿毛に乘り、大夫の方は大切にして、今まで牽かせたのである。義經が檢非違使尉に拜せられ、五位に敍せられたとき、馬をも五位にして、大夫といふ名を與へたのである。（大夫は五位の稱）。その後佐藤三郎兵衞が戰死したとき、これを供養の僧に贈つて、ねんごろに三郎兵衞の靈を弔はしめた。

【鹿の通路は馬の馬場で】 鹿の行き通ふ路は馬のかけまはる場所であるぞ。

「通路」（カヨヒヂ）は、往きかよふ路。往來する路。つうろ。

古今集、夏に「夏と秋と行きかふ空のかよひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ」

伊勢物語に「このかよひぢに、夜毎に人をすゑてまもらせければ」

「馬場」（ババ）は、乘馬の練習をなす場處、又、馬術の練習をなすに用ひる平地。うまば。

【心は先陣と逸れども】 心では、われこそ先陣せんものと、いらだちあせつてゐるけれども。

「逸る」（ハヤる）とは、(一)心の進むこと。(二)勇み立つこと。をどりあがること。あせること。いらだつこと。せ

きこむこと。(四)調子に乗ること。興に乗ること。こゝは(三)の意。

平家物語、五、富士川の戦の條に「廣みへ出でて軍をせんとはやらるれども」

【さすがいぶせき磯なれば】　さうはいつても、あぶなかしく、おぼつかないきりぎしであるから。

「いぶせし」は、(一)おぼつかないこと。(二)氣の晴れぬこと。うつたうしいこと。(三)きたなくていとはしいこと。けがらはしいこと。こゝは(一)の意。

「磯」(カケ・ガケ)は、削り取つたやうに直にそばだつた岸。きりぎし。斷崖。懸崖。

狂言、文山だちに「餘り押すな、山のかげぢやはい」

【手綱をひかへてやすらへば】　手綱をひきとめて、ためらつてゐると。

「手綱」(タヅナ)は、馬具の名。銜(クツワ)に結びつけ、乘る人の手に執つて馬を御する綱。繩又は布を用ひる。その質又は染色などによつて、唐絲手綱・繩手綱・紺手綱・紋手綱等の種類がある。

「控ふ」は、ひきとゞめること。引き抑へること。

「やすらふ」は、(一)ためらふこと。たゆたふこと。躊躇すること。遲疑すること。(二)休むこと。いこふこと。休息すること。こゝは(一)の意。

宇津保物語、俊蔭に「せちにそゝのかしたまへど、とかくやすらひて」

【軍將】　グンシャウ。軍隊の指揮官。いくさの大將。こゝは義經をさす。

【源平の占形】　ゲンペイのウラカタ。源平のいづれが勝つかのうらかた。

「占形」とは、占(ウラ)のおもてにあらはれた象(カタチ)。

「うら」とは、物の象又は徴候(シルシ)によつて疑を決し、又は未來の吉凶を豫想豫言する法。古は鹿の骨又は龜の甲を灼(ヤ)き、その模樣又は裂目によつて吉凶を判じた。後世は多く筮(メドキ)を用ひ、易(エキ)の法によつて占ふ。

こゝでは白・赤の二馬をおとして、それによつて源平の勝敗を占つて見たのである。

【葦毛】　アシゲ。全體が白くて、黑色又は他の色の差毛あるもの。その上に丸い斑紋があれば、これを連錢葦毛といふ。外に白葦毛・黑葦毛・山鳥葦毛・葦花毛などいふもある。

扶桑略記に「薩摩國唐馬一足、(葦毛牝馬)奉ニ進左大臣家ニ」

【白覆輪】　シロフクリン。鞍の緣(フチ)を銀でかざること。又、その鞍。又、「銀覆輪」ともいふ。

保元物語、白河殿攻落の條に「連錢葦毛なる馬に白覆輪の鞍おいてぞ乘られたる。」

【準へて】　ナゾラへて。準(ジュン)して。擬して。よそへて。たぐへて。

【黃覆輪】　キフクリン。こゝは黃覆輪の鞍で、鞍のふちを金でかざつたもの。「金覆輪」ともいふ。前の「白覆輪」參照。

源平盛衰記、二十七、墨俣川合戦の條に「行家は…鹿毛なる馬に黃覆輪の鞍おきて乘つたりけり。」

【木の間】　コノマ。立木の間。樹間。

古事記、中に「いなさの山のこのまよも、いゆきまもらひ戰へば」

【越中前司盛俊】　エツチュウのゼンシモリトシ。

平家物語考證に「補、東鏡に盛國が子といふ」とある。前司といふのは、前越中守の意であるが、同所には「新任の越中守が事務を滯りなく引きついだといふ書狀――解由――を受取らぬ間をいふ。解由を受取れば、官職が進むのであるが、彼の場合はさうではなく、昇殿か三位かをねらつて、そのまゝ前司でゐたのであらう。」といつて、平家物語の本文に「もとは平家の一門であつたが、不肖のために侍になされた。」とあるのを否定してゐる。本文の通りに解すれば、何かの失敗で越中守をやめて、無官でゐるといふことになる。彼は平家のうちでは勇猛の士であつたので、ほかの大將のいやがる山手へ、例の教經と二人で向つた。平家が敗績するや、皆船を爭つて逃げたが、彼はふみとゞまつて、源氏の侍猪俣小平六則綱を組みふせ、首をかゝうとした。そのとき猪俣がお互に名のりをしないで殺したり殺されたりしては、犬猫の首をとるやうなものだといつたので、盛俊は尤もだと思ひ、手をゆるめたところが、猪俣は自分を助けてくれるなら、御身の命乞ひをしようといつた。盛俊は悅んで猪俣を赦した。(平家物語の方では、盛俊はその言に怒り、再び猪俣を殺さうとすると、猪俣は降人を殺す法があるかといつたので、これを赦したとなつてゐて、盛俊を武士的に取扱つてゐる)やがて猪俣は盛俊のすきを見て取つて、盛俊を水田の中に

押したふし、遂にその首をあげた。くはしくは左の各項を參照せられよ。

源平盛衰記、三七、則綱、盛俊を討つ事。

平家物語、九、盛俊最期。

【假屋】　カリヤ。假につくつた家又は陣屋。

大嘗祭式に「所ニ卜定一齋場院之外、預作ニ假屋一蹔收ニ御稻一」

古今著聞集、二に「濱にかりやを造りて道場にせられけり。」

【身振ひ】　ミブルひ。(一)身を振り動かすこと。(二)寒氣又は恐怖のために身のふるひおこること。わなゝくこと。戰慄。こゝは(一)の意。

枕草子、二に「又飲めなどいふなるべし。身ぶるひをし、かしら振り」

【峯の方を守り】　じつと峯の方を見つめること。

「守る」は「目守る」の義。目を放たず見ること。見つめること。

萬葉集、卷八に「衣手にみしぶつくまで植ゑし田をひきたわれはへまもれるくるし」

【嘶え】　イバえ。馬のいなゝくことにいふ。

和訓栞に「い(馬聲)ほゆ(吼)」の義だとある。

和名抄、十一に「嘶、以波由、俗云伊奈奈久。馬鳴也。」

後拾遺集、春上に「粟津野のすぐろのすゝきつのぐめば冬たちなづむ駒ぞいばゆる」

【篠草】　サヽクサ。「淡竹葉」とも書く。禾本科淡竹葉屬の草本。莖の高さ二三尺。葉は廣披針形、鋭尖頭、幅七八分、長さ五六寸に達する。花は粗大なる花穗をなし、八九月頃綠色を呈する。我が國各地の山間陰地に自生する。

さゝのはぐき。たうちく。

【食みて】　ハみて。食つて。たべて。

【城中】　ジャウチュウ。平家の一の谷城の中。

【鞍置馬】　クラオキウマ、背に鞍をおいて、すぐ乘ることの出來るやうになつてゐる馬。

平家物語、七、倶利伽羅落の條に「鞍置馬十疋ばかり追ひ入れられたりければ」

【御曹司】　オンザウシ。九郎義經。前課「浮島が原」の釋義中、「九郎御曹司」の條參照。

【平家の軍左樣あるべし】　平家の武運は、この馬のやうに挫けて、再び起ち難いであらう。

【五十旒】　ゴジフナガレ。「旒」は、旗や幟を數へる單位。

平家物語、待賢門の軍の條に「平家の赤旗三十餘ながれさしあげて」

【梢】　コズエ。木末の義。木の枝の末。木の幹のさき。

後撰集、冬に「もみぢばの散りしく色はかはらねど梢の秋はなほぞ戀しき」

【守つて】　マモつて。「そこにじつとしてゐて。」といふほどの意。

【手綱數多あり】　手綱のつかひわけがいろ〳〵ある。

【一に心】　「第一には、心のしつかりしてゐる事が大切だ。」との意。

【二に手綱】　「第二には、手綱のさばき方が大切だ。」との意。

【三に鞭】　「第三には、鞭のあてかたが大切だ。」との意。

【四に鐙】　「第四には、鐙のあしらひ方が大切だ。」との意。

「鐙」(アブミ)とは、「足蹈み」の義か。馬具の名。鞍の兩脇に垂れて乘る人の足をふみかける具。その制はいろいろある。その壺形なるを壺鐙、輪形なるを輪鐙、舌先の長いのを舌長、短いのを舌短又は半舌といふ。又、その質及び製作地によつて、木鐙・鐵(カナ)鐙・七條鐙・上總鐙・那波鐙・武藏鐙等の名がある。

【所詮】　ショセン。詮ずるところは。つまりは。畢竟は。

法苑義林章に「所レ設法者、所詮義也。」

保元物語、白河殿義朝夜討の條に「所詮誰々も騙けさせ給へ。」

【若き殿ばらは見も習へ乘りも習へ】　「若い連中は、この義經のすることを見習つて、馬に乘り習ふがよい。」との意。

「殿ばら」は(一)高貴の方々。(二)男子の敬稱。

「ばら」は複數を示す接尾語。

【義經が馬の立て樣を本にせよ】　「おれ(義經)が馬をこの殘路に立てる、その立てかたを手本として、それに見習へ。」といふほどの意。

「本」(ホン)は手本、模範。

【眞逆樣】　マッサカサマ。「眞倒樣」とも書く。高い處からさかしまに落ちるさまにいふ語。

保元物語、白河殿、義朝夜討の條に「弓手の方へ眞倒樣に落つれば」

【下知】　ゲチ。さしづ。命令。指揮。

三代實錄、十一、貞觀七年十二月十七日の條に「下知東海・東山・北陸・山陰・南海道、依レ件行レ之。」・

【馬の尻足敷かせて云々】　馬の後脚を折らせて尻の下に敷かせ、ずるゝ〳〵とすべつて降つたのである。急坂をおりるに四足ではかなはない。馬は後脚を折ることは雜作のないものである。

「尻足」は、うしろあし。あとあし。

【兵】　ツハモノ。戰場に立つて武器を使用する人。兵士。軍人。いくさびと。

【城の內へ指覆ひ】　背にさした旗じるしが、丁度城の中をさしおほふやうになつたことをいふ。

【轡】　クツワ。「クチワ」（口輪）の轉。馬の口にはましめる具。手綱をつけて馬を馭するに用ひる。種々の種類がある。その中唐轡・鏡轡・杏葉轡・出雲轡などは、すべて鐵で造る。そしてその磨いたものを白轡といひ、銀で包んだものを銀轡といひ、漆を塗つたものを漆轡といふ。くつばみ。くゝみ。銜。

【手綱搔繰り】　タヅナカイクリ。手綱をたぐること。巧に手綱をつかひわけること。「搔」は接頭語。

曾我扇八景、上に「手綱かい繰りしづ〳〵とあたりを拂つて打たせ行く。」

【巖石】　「ガンセキ。」又、ガンジャク。大きな岩。いはほ。

【苔むせり】　苔が生えてゐる。

「むす」は、生・產などの義。なり出でること。生れること生えること。

萬葉集、卷十六に「山ゆかば草むすかばね」

同　卷一に「川上のゆつ岩むらに草むさず常にもがもなとこ少女にて」

【刀の刄に草覆へる樣なれば】　きり立つた巖石に苔の生えてゐるさまを形容していふ。

【便】　タヨリ。便宜の方法。よるべ。てづる。

【堅唾】　カタヅ。「固唾」ともかく事の成行を危んで、心氣を凝らす時、覺えず口中にたまる唾。「堅」は一生懸命になつて全身が堅くなり、隨つて口もとも堅くなる意か。

「堅唾を呑む」とは、その緊張のうちに唾をのみこむのであるから、動作が如何にもかたくるしいわけである。

源平盛衰記、十四、玉藻扇を立つる條に「この扇誰れか射よと仰せられんと、肝なますをつくり、固唾を呑めるものもあり」。

同三十三、光隆木曾の許に向ふ條に「興醒めて堅唾を呑んでおはしけるに」

【思ひ煩へる所に】　思案にくれてゐるところに。

【三浦黨】　ミウラノタウ、相模國（神奈川縣）三浦半島地方にゐた武士の一團。「黨」とは、武士の團體をいふ。

【甲斐】　カヒ。前課、「浮島が原」の釋義の中に見えてゐる。

【信濃】　シナノ。東山道の一國。修して信州といふ。古は科野と書いた。中部地方の中央高地を占め、四周に山岳をめぐらし、飛驒・美濃・三河・遠江・甲斐・武藏・上野・越後・越中の九箇國と境を接してゐる。長野縣の所管に屬し、三市（長野・松本・上田）、十六郡より成る。養蠶・製絲の業が最も盛である。

【兎一つ起いても】　兎を一疋飛び出させても。（鷹のために）

【鳥一つ立てても】　鳥を一羽飛び立たせても。（同上）

【傍輩に見落されじ】　同列のものどもに見さげられまい。

「傍輩」（ハウバイ）は、(一)同列のともがら。なかま。(二)同一の師に就くともだち。(三)同一の家に奉公する仲間。朋輩。こゝは(一)の意と見てよからう。

「見落す」は「見貶す」の意。接し見て劣れりとおもふこと。みさげること。見くだすこと。蔑視。

源氏物語、若菜の巻、下に「かの人の心をさへ見おとし給ひつ。」

【鐙踏張り】　アブミフンバリ。兩足を開いて強く鐙を蹈むこと。

保元物語、白河殿攻落の條に「鐙ふんばり突つたちあがり」

醒睡笑に「武藏鐙ふんばつて立つ霞かな」

【眞先かけて】　眞先に驅けつけて。

謡曲、八島に「三保の谷の四郎と名のつて、餌先かけて見えしところに」

【畠山】　ハタケヤマ。畠山重忠。鎌倉時代の初に於ける幕府の武臣。武藏の人。父は重能。はじめ頼朝の擧兵に應ぜず、三浦氏を衣笠城に攻めたが、後頼朝に降り、義經に從つて義仲及び平氏を討ち、又奥州征伐に頼朝の先鋒となつて藤原泰衡を攻めた。資性忠亮、深く頼朝に信任せられ、その薨ずるとき、頼家を輔佐すべき遺言を受けた。然るにその子重保が平賀朝雅と爭ひ、朝雅がこれを妻の母牧の方（北條時致の後妻）に訴へたために、元久三年（一八六六）、遂に重保もろとも北條氏の毒手に斃れた。時に年四十二。

【赤縅の鎧】　アカヲドシのヨロヒ。赤色の革又は絲で小札（コザネ）を綴つた鎧。

平家物語、四、宮後最期の條に「伊豆・伊勢兩國の官兵等、馬筏おし破られて、六百餘騎こそ流れたれ。萌葱、火縅、赤縅、いろ〳〵の鎧」

【護田鳥尾】　ウスベウ。護田鳥文（ウスベフ）の轉。或は護田鳥尾（ウスベヲ）の轉。鷲の羽に薄黑き文（フ）のあるもの。矢羽に用ひる。

長門本、平家物語、義仲最期合戰の條に「重籐の弓、うすべうの二十四さしたる矢負ひ」

【栗毛馬】　クリゲウマ。栗毛の馬。栗毛は馬の毛色の名。體毛及び鬣尾とも赤褐色なるもの。橡栗毛（トチクリゲ）、黑栗毛・白栗毛等の種類がある。

槍權三、上に「あれ〳〵、濱手から栗毛馬の遠乘は舍兄伴之丞」

【太く逞しきに乘つたりけり】　肥え太つて、勢のたくましい馬に乘つてゐた。

「逞し」は、勢の盛んなさま。がんじようなさま。

源平盛衰記、三十四、東國兵馬汰の條に「黑栗毛の馬高さ八寸、太く逞しきが」

【鞭打】　ムチウチ。馬の體のうち、乘る人の鞭うつとき、鞭のあたる處をいふ。

【月影】　ツキカゲ。月の形。こゝは、鞭打のところに新月形の白毛の生えてゐるものをいふ。

【大事の惡處】　タイジのアクショ。非常に險阻なところ。

容易ならぬ難所。

「大事」とは、この惡處をきりぬけるか否かによつて前途の運命がきまるほど大切な難所だからいつたことば。

「惡處」は、險阻なところ。難所。

平家物語、五、富士川の戰の條に「惡處を馳すれど馬を倒さず。」

【轉ばしては】　コロばしては。

【親にかゝる時、子にかゝる折】　諺。子が親にかゝつて世話になることもあり、親が子にかゝつて世話になることもあり、時と場合とによつて、それ〴〵しわけねばならぬとの意。人馬を親子に比していふ。

【今日は馬を勞（イタハ）らん】　今日は自分の方から馬をいたはつてやらう。

【腹帶】　ハラオビ、又、ハルビ。こゝは「ハラオビ」の方が句調がよい。馬の腹をくゝる帶。

和名抄、十五に「腹帶、波長於比、馬腹帶也。」

【七寸】　ナヽキ。四尺七寸。

「寸」（キ）は馬の丈をはかるに用ひる語。四尺を定尺とし、それより上へ、四尺一寸あれば「一寸」（ヒトキ）といひ、四尺二寸あれば「二寸」（フタキ）といふ。九寸以上は丈（タケ）に餘るといひ、四尺以下は、三尺九寸なれば、かへり一寸といふ。但し貞丈雜記には、四寸から七寸までのみを「寸」（キ）といふと見えてゐる。

【引きからげて】　引きしばつて。

「からぐ」は、紮ぐ、絡ぐ、などとかく。束ねくゝること。まとひつかねること。しばること。

宇治拾遺物語、十四に「土器を二つ打ちおはせて、黃なる紙捻りにて十文字にからげたり。」

【椎の木のすだち】　椎の木のまつすぐに生ひてゐるもの。

「椎の木」（シヒのキ）は殼斗科椎屬の常綠喬木。幹の高さ三四丈。葉は長楕圓形、粗鋸齒を有し、質厚く、下面は灰褐色を呈する。花は單性、雌雄同株。雄花は黃褐色の穗を有し、夏季開花する。果實は楕圓形の堅果で、囊狀の殼斗に包まれてゐる。我が國の暖地に多く產する。材は建築用・器具用及び薪炭用とし、樹皮は染料に、果實は食用になる、又、觀賞用として庭前などに栽培せら

れる。

「すだち」は、直立の義。眞直に生ひ立つてゐる樹木をいふ。

【捩切り】　ネヂキり。ねぢつて切斷すること。ひねり切ること。

大藏流狂言、布施無經に「十迄の布施物、直中よりふつつりと捩切つて」

國性爺合戰、五に「飛びかゝつて、父が縛めねぢきりぬ。」

ぢきり。

【岩の迫】　イハのハザマ。岩と岩との間。

「迫」は「狹間」とも「迫間」とも書く。(一)物と物との間のせまいところ。あひだ。あはひ。(二)谷あひ。谷。こゝは(一)の意。

【東八箇國】　トウハッカコク。關東八州。箱根關以東の八箇國、卽ち相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野をいふ。

【人倫】　ジンリン。(一)人のたぐひ。人類。(二)人の履み行ふべき道。五倫の道。(三)自然に備はつた人類の秩序關係、卽ち父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の間柄。こゝは(一)の意で、人間わざをいふ。

十訓抄、上に「六畜は主といふことをわきまへねども、あはれを知りてむつる。いはんや心ある人倫をや。」

【鬼神の所爲】　キシンのシ・キ、おにがみのしわざ。

「鬼神」(キシン)は(一)目に見えぬ神靈。(二)あらくおそろしい神。(三)死者の靈魂。こゝは(二)の意。

源氏物語、帚木の卷に「いとやはらかにのたまひて、鬼神もあらだつまじき御けはひなれば」

【舌を振ひける】　非常に驚き怖れたさまをいふ。

保元物語、白河殿義朝夜討の條に「この矢を見るつはものども皆舌を振つてぞ恐れける。」

【不便】　フビン。「不憫」とも書く。あはれむべきこと。かはいさうなこと。

古今著聞集、十に「宇治左府隨身公春を不便に思し召したること、めゝしきほどの事なり。」

【日頃は汝にかゝりき云々】　「ふだんは、おまへの世話になつてゐるが、今日はおまへをいたはつてやらう。」との意。

「日頃」(ヒゴロ)は(一)幾日かの日。多くの日。數日。(二)平生。ふだん。つね。(三)このごろ。近頃。數日來。こゝは(二)の意。

「孚む」(ハグクむ)は「羽含む」の義。(一)親鳥が羽でその雛を抱き被うて育てること。(二)養ひそだてること。養育。(三)撫でいつくしむこと。大切に擁護すること。(四)かばひ守ること。守護。庇護。(五)やしなふこと。療養。こゝは(三)の意。

【人に隨ひて】　おのれの前後にゐるつはもののするとほりにして。

【然るべき八幡大菩薩の御計らひ】　御加護のたいそう深い八幡大菩薩の御とりはからひ。「八幡大菩薩」のことは、前課「浮島が原」の釋義の中に見えてゐる。

【落しもはてず】　まだ馬を落してしまはないうちに。

【鬨を作る】　トキをツクる。どつと、鬨の聲をあげること。

「鬨」は、「鯨波」とも、鯢波とも書く。(一)軍陣で、戰のはじめに發する相圖の聲。大將がえい〳〵と掛聲をなせば、軍勢一同「あう」と聲を合はせる。かくすること三度。これを「鬨を作る」といふ。

平家物語、四、橋合戰の條に「敵平等院にと見てければ、ときを作ること三が度なり。」

平治物語、待賢門の軍の條に「鯨波の聲に驚いて」

【山彦答へて夥し】　鬨の聲が、ものに反響して、たいへんにものすごい。

「山彦」(ヤマビコ)は(一)山の神。(二)山谷などに於ける反響。聲音の反響。もと山彦(山の神)が眞似て答へるものとおもつたから出た語。

「夥し」(オビタゞし)は、(一)數の甚だ多いこと。(二)甚だしいこと。非常なること。仰山なること。こゝは(二)の意。

宇津保物語、吹上、上に「らんじやう・鼓・物の音、一たびに打ち吹き、ひき合はせたり。おびたゞしくめでたし。」

【城郭】　ジョウクワク。「城廓」とも書く。(一)內城と外郭。しろとくるわ。又、城のくるわ。(二)しろ。とりで。(三)うちとけぬこと。へだて。こゝは(二)の意。

周禮の量人に「掌二建國之法一、以分レ國爲二九州一、營二國城郭一。」
源平盛衰記、三十六、一谷城構の條に「誠にゆゝしき城郭なり。」

【縱さま、横さま】 (一)縱の方向と横の方向。(二)縱になり横になること。縱横無盡。
源平盛衰記、二十七、墨俣川合戰の條に「夜廻りの中へ打ち入つて、竪樣横樣に散々に戰ふ。」

【蜘蛛手】 クモデ。蜘蛛の手(左右兩方に四本づつある)のやうに、一つの體から多くの物が分岐するのをいふ。ここは四方八方、八重十文字などの意。
伊勢物語に「水行く川の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。」

【東西の城戸口】 トウザイのキドグチ。東の城門(生田)と西の城門(一の谷)。
「城戸口」とは、城の出入口。城門。
平家物語、九、樋口斬らるゝ條に「生田の森を大手の城戸口とぞ定めける。」

【さしも】 (一)その如くにも。さうも。(二)さほど、それほど。これほど。こゝは(二)の意。

平治物語、義朝六波羅に寄せらるゝ條に「さしもの兵を、敵に首を取らすな」

【打延べて】 ウチノベて。手足をうちのべて、氣樂に休養して。

【軍せん】 イクサせん。

【物具】 モノゝグ。(一)道具。調度。(二)よろひ。具足。こゝは(二)の意。
保元物語、官軍方々手分の條に「直兜にて物具したる兵」

【小具足】 コグソク。鎧の小手、脛當、脇楯のみ着けること。

東鑑、一、治承四年九月十七日の條に「著二紺村濃直垂一、加二小具足一、跪二常胤之傍一。」

平治物語、待賢門軍の條に「鎌田が下人八町次郎とて……腹卷に小具足固めて眞先に進み」

【はと寄せ、どつと鬨を作り】 「はと」は、急におしよせるさまの形容、「どつと」は、多人數一度に立てる聲の形容。

【味方討】 ミカタウチ。仲間を討つこと。同士討。
北條五代記に「やれ味方討よといひしかども、敢へて咎むる人なし。」
甲陽軍鑑、五に「味方討を仕る故なり。」

【討殺され云々】 その文脈は次のとほり。
討殺され／斬殺され　て　上になり／下になつ　て　肝も／心も　身に添はず

【肝も心も身に添はず】 驚き恐れて失神の狀になつてゐることをいふ。
「肝」(キモ)は、(一)肝臟。(二)五臟六腑。(三)きもだましひ。きもだま。心の氣力。膽力。(四)考慮すること。たくむこと。工夫。こゝは(三)の意。
宇治拾遺物語、八に「見るに肝まどひ、例れ伏しぬべき心地すれど」

【度を失ふ】 狼狽して擧動が常の調子を失ふこと。
「度」は、こゝでは、のり・規則・法度などの意。
戰國策、燕に「卒起二不意一盡失二其度一。」

【騷ぎふためける有樣】 あわてさわいでゐる樣子。
「ふためく」は、ばたつきさわぐこと、たちさわぐこと。
古今著聞集、十六に「あわてふためき參りけるに」
源平盛衰記・三十、木曾登山の條に「京中の貴賤、あわてふためきて」

【宿鳥】 シュクテウ。(一)ねぐらを求める鳥。(二)ねてゐる鳥。ねとり。こゝは(一)の意。
李白の詩に「花枝宿鳥喧。」

【廣博】 クヮウハク。「廣」も「博」も、共に、ひろいこと。
源平盛衰記、十九、文覺入定の條に「國も廣博なり、唯所知を十餘所寄進し給へ。」

【武藏坊辨慶】 ムサシバウベンケイ。熊野の別當堪增の子。幼名は鬼若丸。山門(比叡山)に入つて西塔で修行してゐたが、性武事を好み、遂に源義經に從つて各所に軍功を立てた。後義經の京を去つて陸奥に逃るゝや、常に

その身邊を警護した。安宅關に於て義經の危急を救うたことは世の普く知るところである。後、衣川の戰に討死したといふ。

【屋形】ヤカタ。身分ある人の宿所、又は邸宅。こゝは一の谷に於ける義經の陣營。

【假屋】カリヤ、假に造つた家。こゝは一の谷城攻のために假に造つた源氏軍の廠舍である。最早落城に近づいた今假屋の要もない。よつてこれを火いて敵の膽を奪ひ、ひいては敵營を類燒させて、最後の勝をこの一擧に占めようとするのである。

【折節】ヲリフシ。ちやうどそのをり。をりから。

廷慶本平家物語、小松殿熊野詣の條に「太政入道二位殿は、をりふし福原におはしけるが」

【蹴立の灰】ケタテのハヒ。人馬がはげしく蹴ちらして立てる灰。こゝの灰は塵灰を意味する。

源平盛衰記、二十九、平家都落の條に「蹴立のほこり空に充ち滿ちて、朝霧の立つがごとくなり。」

【無慚といふもおろかなり】いた〳〵しいといつたくらゐでは、なか〳〵いひつくされぬ。

「無慚」(ムザン)は、(一)恥を知らぬこと。(二)いた〳〵しいこと。こゝは(二)の意。

「おろか」は、おろそか。疎略。なみ。ひととほり。

この一句は作者の冷靜を示してゐる。散々に活劇を敍したあげくに、ちよつとユーモア的に、「いた〳〵しいといつたくらゐではいひつくされぬではないか。」といつて、氣味のわるい笑をもらすといふ趣である。

8 挿圖

佐原義連鵯城を下る　齋藤弓弦筆。

筆者齋藤弓弦(ユヅル)の傳末詳。

二五　富士の靈

1 解題

野口米次郎著「ヨネノグチ代表詩」の卷頭の「序に代へて」の文の一節を採錄した。

作者が十六歳の時、四日市から船で東上する途中、二月の寒い朝の海上に、始めて見た莊嚴無比な富士の姿、それが作者の詩人としての一生の生活を支配して、常に元氣の源となり、精進のみちびきとなつたといふ話である。

「ヨネノグチ代表詩」は、彼の二十年の詩人生活の間に英詩集六つと邦語詩集六つとを出した合はせて十二の集中から、自信のあるもの七十餘篇を選び集めた詩集である。

大正十三年、東京、新詩壇社發行。

なほ、本課に採つた部分の前に次の數行がある。

——私は自然を禮讃する。

私の自然禮讃は富士山で始まり、富士山で終つてゐる。顧みると私の詩界に於ける旅は短いもので無く、數へると、既に三十年にも垂んとして居るが、一度私の考が自然の慈悲といふことに及ぶと、「旅に寢て夢は枯野をかけ廻つた」芭蕉のやうに、時と場所とを問はず、私はいつも始めて富士山を見上げる少年にたち返り、麗しい曲線をぐつと曳いた裾野を駈廻る…駈廻るといふ言葉は穩當でない、私は裾野に起ち、富士の聳い圓形を眺めて禮拜する。

私は見すぼらしい田舍の一少年として（以下教材）

2 作者

野口米次郎　ノグチ　ヨネジラウ。

明治八年(一八七五)十二月八日、愛知縣津島町に生れた。慶應義塾に學んでゐたが、半途で退學した。明治二十五年、十八歳にして米國に渡り、ジョーキン、ミラーの山莊にゐて彼の教をうけること數年に及んだ。やがて處女詩として

Seen and unseen
From the Eastern

を發表し、爾來續々英詩を出してヨネ、ノグチの名を中外に聽

せた。米國の大學で「日本詩歌論」を講じたこともあるし、英文で「廣重」をかき、東洋美術叢書の第一卷として紐育オリタリヤから出版したこともある。かくて、歐米にあること多年にして歸朝した。今は慶應大學に教鞭を執つてゐる。その詩には非常に感受性の强いところがあり、觀察のきび〳〵したところがある。白秋の詩は器用に偏してゐるが、彼の詩はもつとどつしりした、ゆつくりとした、普遍性の多いものである。その態度は著しく日本主義であつて、廣重を始め抱一・光琳などを喜び、芭蕉をしたひ、能樂を激賞し、松樹を愛してゐる。又彼は日本の雨の變化の多いことを興がつてゐる。著書に

From the Eastern (Book of Poems)

歸朝の記(詩文集)・英米の十二年(イエーツの詩論)・劍と戀の日本(英詩)(ミラーと共著)・夏雲(同)・あやめ草(日英米詩人集)・豐旗雲(日)・The pilgrimage (Book of Poems)・日本詩歌論(論集)・歐洲文壇印象記(カアペンター・イエーツ)・林檎一つ落つ(詩集)・沈默の血潮(同)・二重國籍者の詩・英詩選集(譯詩)・山上に立つ(同)・巡禮禮英詩集・最後の舞踏(詩集)・我が手を見よ(同)・ヨネ・ノグチ代表詩(同・ブックレット等。

最近の支那事變に際して外人の認識を改めるために愛國的努力を拂つた。

3 編纂の用意

外國の諸事情、諸文化を通して日本を再檢討することは、日本を正しく認識するために必要なことである。同樣に日本の有難味を知り、日本の偉大なる力を知り、日本によつて有力に力を與へらるゝことを體感するのは、日本から離れて外國にある時に於て最も著しいはずである。日本精神の理會、日本人意識の養成はかくして本當の効果をあげる。本課はかうした立場からの得難い體驗記である。以て國民的教材の伍列に班すべきものである。

4 要旨

萬葉集にも、國の鎭、國の寶とうたはれた富士、古來我が國を代表する靈山として人のあがめる富士、その崇高なる姿には何人も敬慕の心を持つであらう。今この作者の强い感銘を受けた富士の姿、殊に異國にあつて孤立無援の中に、これによつてはげまされ、これによつて救はれて、日本人としての精神を强くしたこの詩をよんで、日本の誇り、日本のもの、日本の國に對する愛着の念を一層鼓舞したいと思ふ。

5 概說

第一節（一七〇頁―一七一頁二行）序、詩人としての作者の生活が、富士山で終始してゐること。

第二節（一七一頁二頁――一七三頁六行）第一印象に於ける富士山の力。

四年前の渡米の際に見た富士は非常に感銘も深く、美の極致を暗示する尊い姿ではあつたが、なほ第一印象の富士以上には出ないことをのべて、「詩人としての私はいつも第一印象に支配される」といふ、この段の最初の言葉を明らかにした。

第三節（一七三頁七行――一七六頁）挿話。

失望の闇の中に意氣銷沈してをつた時、北齋の富士を見て、勇氣を得、よみがへつた體驗。前節の說を更に具體的に實例で說明したのである。

「私は富士山が語るやうに感じた……」以下は、北齋の富士が語るやうに感じたやうであるが、實は北齋の富士は一つの機緣であつて、今まで忘れてゐた第一印象の富士がそれを機緣に心中によみがへつて、作者によびかけ、力を與へたものと考へられる。

6 取扱上の注意

▲富士山を見た人は多いだらうが、この作者ほどの强い感銘を得た人は少いであらう。誰の目にも同じ形である筈であるが、それでゐて誰でもが同じく見ることが出來ないのは何故であらうか。それはその人の心からである。

▲凡人は何をみても大して驚かない。ハツとしない。驚いても感銘がうすい、ぢき消えてしまふ。それは心が疊つてゐるからである、ぼんやり見てゐるからである。詩人の心は常に清く純粹である、物に透徹してゐる。故に詩人は常に驚いてゐる。さうした心を思うて、こゝにはじめて、この作者の第一印象の强さが理解せられるのではあるまいか。

▲作者は純朴な田舍の一少年として出て來た。たゞでさへ感じ易い十六歲といふ年頃である。時は二月、富士はまさに雪に蔽はれて立つてゐる時である。しかも朝の海上から眺めたその姿、冬の寒く晴れた朝空に獨り高く兀立する雪の富士、それを海上から眺める、思つただけでもその神々しさが身にしみるやうである。「莊嚴無比な神の

表象」と見るべく、時も最も適當な時であつた。かう考へて來た時、その第一印象が詩人としての一生を支配したといふことがうけ入れられて來はしまいか。作者の心も心であるが、富士を見た場合がまた最も幸福な場合であつたことが考へられる。

【▲この第一印象の富士の姿は、作者の心にやきつけられて、作者の詩神となつた。作者は常にこの富士山の崇高な姿を思うては、それをわが進むべき目標として、勇氣を鼓し、精進した。「われはお前を守護してゐる、恐れずに起てよ……」以下の言葉は、その富士が作者のはげみとなり目標となつた有樣を書いてゐるのである。信仰の厚いものはそこに力を得る。富士は作者の詩歌の道に於ける信仰の對象であつたのである。

【▲文章として、單語や形式にむづかしい所はないが、內容は高いものである、いゝ加減によむと、富士の語る言葉など、徒らに誇張をしてゐるといふやうな反感を起さないとも限らぬ。注意すべき所である。

7 設問

1 作者の詩人らしい性格は、どういふ言葉にあらはれてゐるか。

2 第一印象とは、どういふことであるか。

3 「富士の靈」と題してあるのは、どういふわけか。

4 作者の富士に對する心持は、一口に何と言つたらばよいか。(信仰的)。

5 書取練習。

睥睨。代赭色。開拓。沽券。祈禱。輕蔑。神祕。孤獨。高潔。發揮。守護。

8 釋義

【見すぼらしい】 貧相な。みなりのわるいのにいふ。

【田舍の一少年として】 時に十六歳であつたことが後文で知られる。

【あゝ、その時】 「私に對する自然禮讚の幕は切つて落された。」に續くのである。「寒風肌を劈く二月の朝であつたが」といふ一句をはさんで、その時のありさまを明瞭な

らしめたのである。「あつたが」の「が」は、單に語句を接續せしめるだけのもので、前後の間に逆接的な氣持はないのである。

【劈く】 ツンザく。

【私に對する自然禮讚の幕は切つて落された】 私の自然禮讚ははじまつた。幕といひ、切つて落すといふは、芝居にたとへてのいひ方である。

【自然禮讚】 シゼンライサン。自然の見方はいろ〳〵ある。例へば日本文學を辿つて考へて見ると、原始人は自然現象に驚異を感じた。萬葉歌人は自然と融合した。古今集歌人は自然と遊離しようとしたり、融合しようとしたりして、不安定なやるせなさにあつた。新古今集歌人には自然は歌の材料以上に何物でもなく、自然は唯美しいものになつた。そこで西行はもう一度自然の懷に歸つて行くために一生を放浪生活におくつたが、何しろ持つて生れた主觀性が强いので、兩者がともすれば反撥し合つた。それでも彼は自然を忠實に見よう、實際に見ようとしたが、結局は自然が幽玄のものであり、美しいものであり、主觀を痛ませるものであり、生命を託するに足るものであつて、何れかに徹することができなかつた。實朝は萬葉調にかへつて、自然の現象に竝行し、現象に卽して表現して行くといふ平易な態度をとつた。それ以後の新しい見方をするものは芭蕉に至るまでなかつた。芭蕉の態度は現象の奧の本體界に突入しようといふ、やゝ禪的な哲學的なものであつた。蕪村になると、自然は彼の俳境にとつて第一義でなかつた。明治になつて、子規は寫生の對象を自然に向けたが、當時の寫生なるものは、今日から見ると、內容空疎のそしりは免れない。齋藤茂吉は實相觀入をとなへて、子規の寫生道を完成したが、これは芭蕉と萬葉とを合はせ、更に佛敎味を加へたもので、どこまでも哲學的感激であつて、直接自然に隨喜し、渴仰し、禮拜するものではない。

然るにこゝに「自然禮讚」といふのは、自然の慈悲に浴してゐるので、自然が有難くて〳〵しやうがないのである。自然の美・壯・幽などに接すると、おのづと頭がさがり、涙が出るのである。かうなると自然は觀賞用ではな

い、自然はリズムのみではない。神である、合掌禮拜せねばならぬものである。そこに原始人の自然觀に近いものがある。

【莊嚴無比】　シャウゴンムヒ。これ以上に自然讃歎の語はないと考へてゐるところが見える。そこで遂には「神」といふ言葉が易々と出てくるのである。

【表象】　ヘウシャウ。（英 Idea, Present ion 獨 Vorstellung）

（一）感覺を要素とした心的複合體で、比較的獨立した客觀的意識內容。（知覺ともいふ）

（二）意識に思ひ浮べられた――即ち再生された心像（觀念ともいふ）

（實際は混同して考へられる）

【神の表象】　神の觀念。富士山の莊嚴に神の觀念を得たのである。そこに禮讃が起る。

【第一印象に支配される】　最初に教室で叱つた子供はいつまでもわるい印象が殘される。その印象はなか〳〵とれない。よいことをしても、それは變則と考へられる。反對に最初によい印象を與へた子供はいつまでもよいものに思はれ、たまに惡いことをしても、それが變則と考へられる。蓋し吾々の腦髓は素絹のやうなものであつて、そのあまはだに印象されるものはなか〳〵消えないのである。

【自然の現象がそれ〴〵特殊の姿を見せるのは始めて接する刹那に於てだ】　自然現象に對して、人々が最初に接した瞬間に、その自然現象から特殊の姿を見とることが出來る。それから後には何度その同一の自然現象を注意して見ても、最初の瞬間に見たやうな特殊な姿を見ることは出來なくて、普遍的一般的の姿しか見得ることが出來ない。たとへば或山を見るにしても、最初の瞬間にこそその山獨特の姿を感得し得るのだが、二度目からは平凡な昔通な山の要素しか見當らない。別な言ひ方にすれば、最初の一瞬にはその自然現象の個性が潑剌として見られ、二度目からは概念化された自然現象しか見えてこないといふのである。これは感受性の强い、炯眼な、鋭く磨き立てられた心を持つ人に於て特にさうなのである。

【刹那】　セツナ。瞬間。もと梵語 Ksana の音譯で、「劫」に對して極めて短い時間をいふのである。俱舍論に「時之極少名二刹那一、時之極長爲レ劫。」とある。探玄記には「刹那此云二念頃一、於二一彈指頃一有二六十刹那一。」とある。即ち刹那とは、一度指を彈く時間の六十分の一にもあたる短い時間である。

【しよんぼり私を見送つて居るものがある】　「しよんぼり」はひとりゐてさびしく力ないさまである。今作者が富士山をしよんぼり立つてゐると見たのは、作者の主觀による所が多い。

【紫色に空をくつきり染抜いた富士山の圓錐體だ】　紫色の富士山がその圓錐體の輪郭あざやかに、夕暮の空に浮んでゐることをいつたのである。「くつきり」は、輪郭のあざやかなさま、「圓錐體」（エンスキタイ）は、直角三角形の直角に隣りしてゐる一邊を軸として廻轉させた時生ずる立體である。

【時も時であるが】　遣る瀨ない物寂しい孤獨の感にうたれた一つの理由を斷つてゐるので、故國を去つて渡米する際であり、やうやく故國の山も見えなくならうとする、しかも夕暮であるから、さうした感にも打たれる筈の時ではあるがといつたのである。

【遣るせない】　何とも慰めるすべがない。何とも心のまぎらしやうがない、どうにもしやうのない氣持。

【滂沱】　バウダ。涙・雨などの盛に流れる貌。

詩經の國風に「靡朕無爲、涕泗滂沱。」

「滂」は盛に流れる貌。又、水流の音。風の音。「沱」は涕の垂れる貌。大雨の貌。

【その富士山であつた】　十六歳の時に始めて接した第一印象の時の富士山であつた。

【正義の道には努力の花が咲く】　正義の道に於ける努力は、いつかは認められてむくいられるといふ意。努力の花は、努力といふものを一本の草に見たてたいひ方で、正義の道の「道」に對する緣である。

【祈禱の殿堂にはいらせよう】　くじけた、分散した心をひき立て、統一させ、崇高な氣持にさせようとすることをいふ。「殿堂」とは美しい建物・場所・境地をいふ流行語。

【私はその富士山のお蔭で……】　圖示すると次の如くな

る。

私は｛その富士山のお蔭で／その富士山の祝福を受けて｝少なくとも……理會して、詩歌の道を歩むことが出來た。

「その富士山」は、いふまでもなく始めて眺めた富士山である。

「祝福を受けて」は、惠をうけてといふほどの意。「祝福」は Blessing の譯。キリスト教で、わざはひを拂ひ福を降して神聖にし幸福にすることをいふ。

【理會】リクヮイ。理性によつて會得すること。

世說に「時人以謂、山濤不學孫吳而闇與之理會。」こゝでは十分に理解する。完全に了解する、といふ程の意に用ひてある。

近時解釋學上の術語として嚴密な意味を與へて用ひられてゐる。

【單純な心】疑つたりひがんだりしないで、あるがまゝ見るがまゝを、その通りにうけ入れることの出來る心。童心といふもこれである。詩歌はこの心から生れる。

【挿話】サフワ。Episode の譯語。一篇の作品の中に挿まれた、本筋に直接關係のない短い話。

【驚くべき霧】夏目漱石の「霧の倫敦」の一節に、次のやうに記してある。

「表へ出ると、二間ばかり先は見える。その二間を行盡くすと、また二間ばかり先は見えて來る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程新しい二間四方が現れる。その代り今通つて來た過去の世界は、通るに隨つて消えて行く。

四つ角で馬車を待合せてゐると、鼠色の空氣が切拔かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それだのに、馬車の屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにゐる。此方から、霧を冒して飛乘つて下を見ると、馬の首はもうぼうとしてゐる。馬車が行違ふ時は、行逢つた時だけ、綺麗だと思ふ。間もなく、色のあるものは濁つた空の中に消えて仕舞ふ、漠々として無色の裏に包まれて行く。

【鯱】シャチ。「さかまた」の異名。哺乳類中游水類の一種。體長二丈許り。「いるか」に似てゐる。性質が猛惡で、

他の海產動物を捕へて食ふ。時には鯨・いるか等をも殺して食ふことがあるといふ。

【鮫】サメ。板鰓類に屬する魚類。他の魚類と異なり、胎生するものが多い。性質が强暴で、多くは魚類を餌食とする。

【地獄の幾町目かとも思はれる】薄氣味惡さを具體化していつた。地獄は佛敎でいふ語で、この世で惡業を作した衆生が、死んで後墮ちて種々の苛責をうける所、そこには光といふものが無いので、霧にこめられたさまを譬へたのである。地獄にもこの世の町のやうに一町目・二町目など區分があるかのやうに、幾町目といふ言葉を用ひた。

【後生大事】ゴシャウダイジ。「後生」は死んでから生まれかはる世卽ち來世である。その來世に於ける安樂を願ふためには、この世に於ては如何なる犧牲もしのばなければならない。それ程後生は大事なものである。その後生を大事にするやうに極めて物を大切にすること。

浮世風呂に「手拭ひをいくぢなく前へあて、ごしやうだいじに向かふをにらみつめて」とある。一所懸命にらみつめてゐる樣であるが、一所懸命といふよりは何か揶揄的氣分が含まれてゐるやうに見える。こゝの場合も「出版者から輕蔑された詩の原稿」といふ言葉からつゞいた感じは、自らを揶揄して、つまらぬものを一所懸命になくすまいとしてゐるといふやうな氣持があるやうに見える。

【ビニョン】Robert Laurence Bynon. イギリスの詩人、批評家。オックスフォード大學卒業。千八百九十三年大英博物館に入り、千九百年東洋繪畫部長となつた。美術研究家として名高く、我が國の浮世繪についても熱心に研究を試みた。千九百二十九年(昭和四年)秋に來朝し、東京帝國大學で"Landscape in English art and Poetry"と題する六回にわたる講演を行つた。

【ムーア】George Moore. イギリスの小說家・批評家・評論家。アイルランドに生れた。千八百七十年パリに赴き、千九百年歸國。千九百十年までアイルランドに止ま

り、ついでロンドンに出た。千九百三十三年歿。

【私の心は暗かつた、冷(ツメ)たかつた】 詩稿は出版出來ないし、失望の闇におちて元氣を失つてゐたのである。

【濛々】 モウ〳〵。霧など立ちこめて薄暗いさま。

【鮠】 ハエ。硬骨類に屬する魚。長さ五六寸に達し、美しい赤斑がある。幼魚と雌とは色が蒼白で、白鮠といはれる。鮠をハエとよむは國訓で、支那ではなまづに似て大きい一種の淡水魚のこと、音はクヮイである。

【諸子】 モロコ。もろこばえ(諸子鰷)の略。二寸位。たなごに似て、背が黑く、腹が白く、側面に黑い條がある。近江の諸子川に多く產するから名としたのである。

【沽券】 コケン。古くは土地の賣買を證する書付といふ意味に用ひたが、後には、賣値・ねうちといふ意味に用ひるやうになつた。こゝも後の意味で、「沽券に關(カ、ハ)る」とは、ねうちに關係する、つまり品位が下がるといふ意である。

【北齋】 葛飾北齋。カツシカホクサイ。姓は藤原、氏は中島又は川村。名は爲一。幼名は時太郎、後鐵藏と改めた。畫名は勝川春朗・叢春朗・群馬亭魚佛・菱川宗理・辰齋・錦袋舍爲一・畫狂人・卍翁など。父は幕府の用聞の鏡屋で、中島伊勢といつた。寶曆十年(一七六〇)九月江戸本所に生れた。始め彫刻を學んだが、十九歲の時勝川春章について浮世畫を學び、師の姓を冒した。やがてひそかに狩野派を學んだため破門された。天明七年(一七八七)二十八歲のとき俵屋宗理の畫風を慕ひ、菱川宗理といつた。後、堤等琳・雪舟を慕ひ、住吉廣行に就いて土佐風を學び、又明畫を參酌し、遂に一家をなした。時に寛政十年(一七九八)彼が三十九歲の頃である。嘉永二年(一八五〇)四月十八日歿した。年九十。性質は褊狹奇拔で、人に屈せず、嘗ては馬琴と爭論して遂にこれと絕交したこともある。隨つて貧苦に惱むこともあつた。併しその畫は筆力が强く、想意が斬新で、夙に歐人の喜ぶところとなつた。中でもその富士山は、殊に有名である。

【凱風】 ガイフウ。南風。

詩經に「凱風自レ南。吹ク彼棘心ヲ。」

【代赭色】 タイシャイロ。赤褐色。「代赭」は顏料に使ふ赤色の粉末で、支那の山西省代州產のものを上等品とするので代赭といふのである。

【兀立】 ゴツリツ。そびえたつこと。

【睥睨】 ヘイゲイ。にらみつけること。

【面目(メンモク)を發揮せよ】 東海詩人はかくの如きものであるといふ本來の姿をあらはし出せ。

「面目」はすがた、ありさまといふやうな意に用ひた。又、メンボクとよんで名譽といふ意にも用ひる。

【その時から倫敦の澁面は笑ひ始めた】 主觀の變化が外界の變化を致したことを巧に言ひあらはしたのである。

「澁面」(シフメン)は「しぶつら」ともいふ。不滿足な顏つき。にが〳〵しい顏。

太平記曦鏡、二に「眉を蹙めつ、眼を見出だし、膝押しまくり、澁面作り、返答胸にあぐみし體」

【富士山に負ふ】 富士山のお蔭をかうむる。

【表示したものに外ならぬ】 表示したものであるといふのを、逆に否定の形式をかりていつたので、肯定の形式でいふよりも意味が强まつてゐるのである。

9 挿圖

凱風快晴

葛飾北齋の「富嶽三十六景」中の一つである。本文にあるロンドンで見た「凱風快晴の富士」といふのは、この繪の木版着色畫である。

10 參考

1 修辭上注意すべきもの

富士山が語りかけるやうに書いた所は別として、他のいひ方の中、修辭の上から注意すべき點の主なるものを列擧してみる。

○私に對する自然禮讚の幕は切つて落された。

○その晩も私は暗かつた、冷たかつた。

○その時から倫敦の澁面は笑ひ始めた。

何れも新しい譬喩のいひ方である。暗い冷たいは、視覺・觸覺の上の用語をうつして、失望に意氣銷沈してゐる心の狀態をのべたものであるが、概念的に直接にいふより、かく譬喩的

にいふ方が、ある具體的の觀念がつけ加はる爲に力强くはつきりと感じられるのである。

○しよんぼり私を見送つて居るものがある…何物か。これこそ…。

一應ぼんやり『もの』といふ言葉で提示しておいた上に、『何物か』と讀者に考へさせて、後『これこそ…』と解決を與へてゆく。富士山の印象を强く讀者に浮ばせる用意として有効である。讀むにもそのつもりで、相當のポーズをおきたい。

○『……』と私に勢を附けてくれたものは、その富士山であつた。『……』と私を勵ましてくれたものは、その富士山であつた。『……』と語つて、私の守護神となつたのは、私が始めて眺めた富士山であつた。

漸層法といふべきである。

二六　文化と健康

渡邊錠太郎

1　解題

故陸軍大將陸軍教育總監渡邊錠太郎氏が某雜誌記者に試みた談話の筆記である。本教科書に採錄するに當つては大將は既に物故された後であつたので直接校訂を受ける事は出來なかつたが、遺族によつて、故人の平生の抱負が十分に表明されてゐる旨の證言を得た。

2　作者

渡邊錠太郎　ワタナベ　ヂヤウタラウ。

明治七年(二五三四)愛知縣に生れた。陸軍士官學校、陸軍大學校を卒へた。師團長・陸軍士官學校長・軍事參議官・陸軍教育總監等の要職に歷任した。昭和十一年卒、年六十三。

3　編纂の用意

巻六を終るにあたつてこの一文を以てした。健康が人間活動の第一要諦であることは誰でも知つてゐる。しかしまたこれは屢〻忘れられ、無視される實情にある。殊に勉學心に燃える三年生時代には、健康を害することも意とせず勉强に打込んで、英雄的な得意の心境になる者すら有りがちである。しかしそれは大いなる誤であつて、健康の伴はないところに物事の進步成就はないのである。然らばこの健康は如何にして求め、如何にして期待出來るかといふ點になると、また世人は種々の誤謬に陷り易いのである。殊に文化生活といふやうなものは健康と背馳の方向を取つてゐることも少くないのである。

本課の文はかういふ點についてよく考へよく論じてあるので、この文の一讀は大きな好影響を青少年に與へ、從つて、學校生活、人間としての生活に指導を與へることが少くないと信じて卷末の結びとしたのである。

4　要旨

前項に於て述べた如き觀點から、健康の必要、人生に於ける健康の重要性、歐洲殊にドイツに於ける保健上の施設、文化生活と健康との關係等を平易に述べたものである。

5 概說

この文は大きく前後の二段に分れ、各段はまた三四の小節に分れてゐる。

前段（一七六頁――一七七頁一一行）
身體の健康といふことには如何に重大な意義があるか、如何に價値があるかといふことを說いてある。
（一）健康な身體に健全な精神が宿る。
（二）健康は一個人の幸福に止まらず國家の幸福である。
（三）健康は人格完成の第一要諦である。

後段（一七七頁一二行――終）
如何にして健康を得べきかを說いてある。
（一）鍛錬の必要。
（二）ドイツ青年の鍛錬の實情。
（三）壯丁檢査の成績から見た我が少青年の體位。
（四）文化生活と鍛錬との關係。
（五）鍛錬は質素を母體として生れてくる。

6 取扱上の用意

▲用語も平易で、文章も明晰であるから、ずつと通讀させて、意味をとらせたらよい。たゞし論述してある內容は傾聽に價するものがあるから、これはよくかみしめて、能ふべくんば實行の範とするの域まで到らしめたいものである。

▲健康は人格完成の第一要諦であるとの結論を導き出してあるところの論旨の進め方はよく讀み取らして、作文なり、論述なりの參考にさせたい。

▲鍛錬を大いに强調してある。これは生徒の修養上の資としたい。鍛錬といふことは要するに精神力に基く。かうと決心してやりはじめたことは途中で挫折しないでやりとほすのでなくては鍛錬にならない。鍛錬を單なる肉體的の問題だと思つては間違ひである。筆者渡邊大將は、この物事を挫折せずしてやりとほすといふことに非常に强固な精神力を有して居られた。生前にかつて次のやうな事を話して居られた。

一、自分は立派な軍人となるには勉强せねばならぬと思つた。それには色々と本を讀まねばならぬ。併し將校として勤務してゐるとまとまつた讀書のひまがない。色々考へた末、部下を引率して演習に往復する道中で讀書をすることに氣がついた。それからは新らしく本を買つて來ると、毎日演習に行く度に、その往復で讀めさうなだけの頁を切取つてポケットに入れて出かけて、それを讀みながら行くことにした。これを少尉時代から缺かさず實行したから、非常に多くの書物を讀むことが出來た。

二、きめた事は必ず行ふ修養をした。それには顏の鬚を剃ることにした。隔日に一回必ず剃ることにして何十年間決してこのきまりを破らないでゐる。若し渡邊の顏に不精鬚を發見した者は申し出よ。

このことは、鍛錬の精神的要素の實例として生徒に話してやつてよいものであると思ふ。

▲ドイツ青少年の鍛錬の話も非常に參考となると思ふ。恰もヒットラーユーゲントの來朝した時で、一層切實に我等少青年の參考となるであらう。

7 設問

1 健康であるといふことには如何なる意義が存するか、箇條書きにして列擧せよ。
2 「健康は人格完成の第一要諦だ」と斷じてあるが、そのわけを話せ。
3 「孝の最初であり、又最後である。」といふことの意味を平易に述べて見よ。
4 鍛錬といふことを完全に遂行するのにはどんなことが最も大切であらうか。
5 ドイツ體育協會の講じた方策で、どんな點を最も感心したか。
6 眞の文化生活といふのはどんなものであらうか。
7 軍人に賜はつた勅諭の五綱目は何と何か。

8 釋義

【健康な身體に健全な精神は宿る】 ケンカウなシンタイにケンゼンなセイシンはヤドる。

健康は身體の丈夫なこと。精神は「心」。つまり「丈夫な身體に丈夫な心が宿る」といふこと。

【不撓不屈】　フタウフクツ。「撓」はたわむこと、「屈」は折れること。
途中でたわむことや折れることのないこと。

【克服】　コクフク。「克」は勝つこと。「服」は征服の服。
相手に勝ち征服すること。

【旺盛】　ワウセイ。「旺」は「盛」といふこと。旺盛は極めて盛んなこと。

【闘争心】　トウサウシン。戰ひ爭ふ心。

【義】　ギ。正しきすぢみち。五常の一。〔仁義禮智信〕。

【濶歩】　クワッポ。「濶」は「闊」の俗字。大またに歩くこと。
安心して自由に動作すること。

【中正】　チュウセイ。眞直で曲らないこと。一方に偏らないで正しいこと。
管子に「爲二人君一者、中正而無レ私。爲二人臣一者、忠信而不レ黨。」

【美を解し】　ビをカイし。物事の美しさをわきまへる。

【情を知る】　ジャウをシる。「情」は心が物に感じて動く働き。
物事のあぢはひ、おもむきを了得すること。

【優雅】　イウガ。やさしくみやびやかなこと。

【心情】　シンジャウ。こゝろ。「情」も心。

【招來】　セウライ。人を招き來らしむること。
史記に「大夏三屬、皆可二招來一而爲二外臣一。」

【練達】　レンタッ。物事に熟練してゐること。
後漢書に「年八十、而心力克壯、練二達事體一」

【智仁勇】　チジンユウ。「智」は是非や善惡を知り區別すること。
「仁」はなさけ深いこと、「勇」は勇氣のあること。

【世界優秀】　セカイイウシウ。世界中ですぐれてひいでゝゐること。

【一員】　イチイン。一人。

【關心】　クッンシン。心にかけて忘れないこと。
王維の詩に「晩年唯好レ靜、萬事不レ關レ心」

【盛衰】　セイスヰ。盛んなると衰ふること。

【慶福】　ケイフク。さいはひ、祝福。

【德行】　トクカウ。道にかなつた正しい行爲。
孝經に「非二先王之德行一、不二敢行一。」

【孝經】　カウキャウ。一卷、曾子の門人が孔子の言行を錄したものといはれる。孝道を說いた經書。漢の初め顏貫等によりて世に出たものを今文孝經といふ。孔子の書院の壁より出たと稱せられるのを古文孝經と言ふ。

【身體髮膚これを父母に受く、敢へて毀傷せざるは孝の始なり】　シンタイハップこれをフボにウくアへてキシャウせざるはカウのハジメなり。
身體、髮膚は父母に受けたものであるから、敢へて破り傷つけないのが孝の第一着手であるといふこと。

【孔子】　コウシ。周の春秋時代の人、名は丘、字は仲尼。魯の昌平鄕の鄹邑闕里に生る。三代聖王の遺敎を祖述するのに一生の力を盡した。初め魯の政治に當り用ひられず、遂に半生を諸國遊歷に送り傳道に努めた。晩年魯に歸つて、禮樂詩書を刪定し、周易を贊序し、春秋を修正し以て先王の舊を傳へた。弟子三千人。周の敬王四十一年（我懿德天皇三十二年）四月十一日七十四歲にて歿す。
子供に鯉といふ人があつた。

【健康は孝の最初であり、又最後である】
健康は孝の第一歩であるが、又子供の健康は最も心を勞するところであるから、健康であるといふことが至上の孝行でもある。即ち健康といふことは徹頭徹尾親に對する孝行となる。

【人格完成】　ジンカククッンセイ。「人格」は人の性格、人がら人品。
人がらを立派に作り上げること。

【第一要諦】　ダイイチエウタイ。第一に位する肝要缺くべからざる眞理。

【過言】　クッゲン。言ひすぎること。

【信賴】　シンライ。信じ賴る。

【增進】　ゾウシン。增し進める。

【消極的】　セウキョクテキ。積極に對する語。事の否定的、

非能動的なことで、進んで物事をしないこと、即ちひつこみ思案のこと。

衞生上に於ても唯病氣を防がうとするものであつて、自分から進んで身體を丈夫にしようとしないこと。

【鍛錬】　タンレン。ねりきたえること。

方于の詩に「文章鍛錬猶相似、年齒參關不レ較レ多。」

【辭】　コトバ。言葉に同じ。

【奇異】　キイ。不思議。常と異なつて珍しいこと。

【措いて】　オいて。置いてに同じ。かへり見ないこと。

【潑剌】　ハツラツ。潑剌に同じ、魚がぴち／＼と躍りはねる意で元氣盛んなこと。

【明朗】　メイラウ。ほがらかなこと。

【健康美】　ケンカウビ。健康な身體のもつてゐる美しさ。

【基調】　キテウ。基礎に同じ。

【雄大】　ユウダイ。を〻しく大なること。

王惲の詩に「中條鬱蒼蒼、首尾固雄大。」

【雄勁】　ユウケイ。を〻しく強いこと。「勁」は「強し」といふ意。

圖書見聞誌に「吳道子所レ畫、牆壁卷軸、落筆雄勁。」

【人生の若芽時ともいふべき……】　ジンセイのワカメトキともいふべき。

人の一生を木にたとへて見れば青少年は若芽時代であるといふ意。「べき」は、「……といつてもよい」といふ意。

【具足】　グソク。充分に備はつてゐる。

法華經に「此大良藥、色香美味、皆悉具足。」

【人格の士】　ジンカクのシ。人柄の立派な人。

【現在】　ゲンザイ。只今、今日。

【刻苦艱難】　コククカンナン。「刻苦」は骨折りつとむる。「艱難」は苦しみ。

苦しみを忍んで骨折りつとむること。

【耐忍び】　タヘシノび。我慢すること。

【人生の目標】　ジンセイのモクヒョウ。一生の目的。

【遲々】　チチ。進まない樣にいふ。

【苦鬪】　クトウ。苦しみた〻かふこと。

【日課】　ニックヮ。日々の行事。

陸游の詩に「老人無二日課一有レ興即題レ詩」

【晨朝】　シンテウ。「晨」はあしたの意、朝といふ意味。

【胸を突く】　ムネをツく。思ひ出してぐつと胸にこたへること。

【徴兵檢査】　チョウヘイケンサ。法律によつて徴兵の年齡（滿二十一歳）に達した者を檢査すること。

【壯丁】　サウテイ。「壯」は、働きざかりの男子。丁は二十一になつた男子をいふ。

【艱難汝を玉にす】　カンナンナンヂをタマにす。

なやみ、苦しみに打ちかつて努力をすれば遂に成功するといふ意味。

【讃美】　サンビ。ほめた〻へること。〔讃美歌〕

【難局】　ナンキョク。處理するに非常に困難な場合といふ意。

【自若】　ジジャク。物事に臨んで心の少しも變らないこと。

史記に「曾參殺レ人、其母織自若也。」

【正義】　セイギ。正しい道。正道に同じ。

【畢竟】　ヒッキャウ。つまり。結局。

李商鶚の詩に「鶯花啼又笑、畢竟是誰春」

【練達】　レンタツ。熟練に同じ。鍛錬のつんだといふ意味。

【想起】　サウキ。前のことを思ひ出すこと。

【歐洲大戰】　アウシュウタイセン。世界大戰のこと。西暦一九一四—一九一八年。

大正三年から七年までに亘る世界的大戰爭。一九一四年六月サラェヴォに於ける墺國皇儲暗殺事件が原因となり以前より激化してゐた英獨の世界政策上の對立が爆發し、ドイツを盟主とする同盟國側（獨、墺、洪土勃等）とイギリスを中心とする聯合國側（英、佛、露、伊、日、米等）との間に激烈な戰爭が歐洲始め世界各地で行はれた。その結果聯合側の勝利になりヴェルサイユ講和條約によつてドイツ側の戰敗國には多大の犧牲が課せられた。

【疲弊困憊】　ヒヘイコンパイ。つかれよわること。苦しみつかれること。

【到底】　タウテイ。つまるところ。どうしても。

【復興】　フクコウ。再びおこす。再興。

後漢書に「廢而復興」

【恢復】　クヮイフク。衰へたものをもとの通りにかへす。

王惲の雙廟懷古の詩に「蔽遮不レ使前、恢復可二立見一」

【士氣】 シキ。意氣。元氣。

【極度】 キョクド。此の上なく。

【體育協會】 タイイクケフクワイ。體育に關する研究調査及び教授指導等を掌る會。

【目擊】 モクゲキ。直接目に見ること。正しく目に認めること。

　莊子の田士方に「仲尼曰、若夫人者、目擊而道存矣。」

【青少年簡易宿泊所】 セイシャウネンカンイシュクハクジョ。青年少年が簡單に宿泊するやうに出來てゐる所。

【會員制度】 クワイヰンセイド。一定の會員を以て國體若しくは機關を組織する方法。こゝでは體育協會が會員制度で出來てゐる。

【素封家】 ソホウカ。富豪。金滿家。

【解放】 カイハウ。人の自由にまかせること。

【自炊】 ジスヰ。自分で炊事をすること。

【認識】 ニンシキ。對象を感知してこれを分別判斷するはたらき。認めること。

【注入】 チュウニフ。そゝぎこむこと。つぎこむこと。

【跋涉】 バッショウ。山野を跋み越え、水を涉ること。諸處を歩きめぐること。

　詩經の鄘風、載馳に「大夫、跋涉、我心則憂。」

【偉容】 ヰヨウ。立派なすがた。

【潤色】 ジュンショク。飾りて光澤を添ふ。美しく修飾すること。

　論語の憲問に「東里子產潤色之。」

【培ふ】 ツチカふ。養ふ。

【聯邦】 レンパウ。二箇以上の國家が聯合して一國を組成し、獨自の主權を有するもの。合衆國・ロシヤの如きもの。

【風俗】 フウゾク。世間に古くより馴れ行はれて來たこと。世のならはし、ならひ、しきたり。

　詩經の關雎序に「美二教化一移二風俗一」

【傳統】 デントウ。系統をいふ。又、傳はれる系統。

　沈約の文に「守レ器傳レ統、于斯爲レ重」

【人情】 ニンジャウ。人間本來の溫い感情。なさけ、いつくしみ。

　禮記に「思慕之心、孝子之志也、人情之實也。」

【國家統制上】 コクカトウセイジャウ。國家をすべ治める上から見て。

【不可缺】 フカケツ。缺くことの出來ない。

【必定】 ヒツジャウ。たしかなること。

　謠曲、木曾に「かゝるめでたき事こそなけれ。この度の軍に勝たんずる事必定なり」

【視聽を敬てる】 シチャウをソバタてる。見ること、聞くこととといふこと。卽ち人の注意を引くこと。

【躍進】 ヤクシン。をどり進むこと。とびあがりて突進すること。

【名簿】 メイボ。諸人の名を署したる帳簿。

【破棄】 ハキ。やぶりすてること。こゝでは條約を履行しないこと。

【意圖】 イト。目的。

【傾向】 ケイカウ。或る方向に進まんとするかたむき。

【憂慮】 イウリョ。うれへおもんぱかる。氣づかひ、心配。

　諸葛亮の出師表に「受レ命以來、夙夜憂慮」

【ゆゝしき大事】 ゆゝしきダイジ。容易ならぬ大事。

【爲政の局に當る】 イセイのキョクにアタる。政治を行ふ職務に當つてゐる。實際政治をやること。

【所謂】 イハユル。「言ふ」に助動詞の「ゆ」のついて出來たもの。後に助動詞ゆは亡びたので「いはゆる」は一語となる。

　「言はるゝ」「世に言はるゝ」「常に言ふ」

　神代紀に「一劍、此所謂草薙劍也」

【三省】 サンセイ。幾度も我身を振り顧みて己が身を修むること。

　曾子が日に三つの不道德な行爲がなかつたかどうかを反省した故事から出た。

　論語の學而に「曾子曰、吾日三省二吾身一、爲レ人謀而不レ忠乎、與二朋友一交而不レ信乎、傳不レ習乎。」

【文化生活】 ブンクワセイクワツ。「文化」とは學問の進歩すること。

學問、藝術、文學、教育、政治、風俗、宗教、經濟、交通等の進歩すること。それらの價値の實現に努力し、又はそれら享受する生活の意味。それを文化生活といふ。

【提唱】　テイシャウ。或事を提示して唱導すること。となへること。

【魅了】　ミレウ。すつかり人を魅すること。不思議に人の心を引きつけること。

【安易逸樂】　アンイイツラク。やすらかに遊びたのしむこと。遊びくらすこと。

【懶惰】　ランダ。なまけおこたる。

陶潛の責子の詩に「阿舒已二人懶惰故無正」

【放縱】　ハウシャウ。ほしいまゝなること。きまゝなこと。

王僧儒の文に「天然放縱、極有二筆力一」

【不眠不休】　フミンフキュウ。ねむらず休まずといふことで、一生懸命いつでも努めること。

【全き】　マッタき。完全な。

【人の和】　ヒトのワ。人がお互に融合すること。

【その分を嚴守する】　そのブンをゲンシュする。各人の守るべき本分をかたく守ること。

【確乎たる】　カクコたる。しつかりした。

【規範】　キハン。手本。のり。法式。

陸雲の答二兄平原一詩に「今我頑鄙、規範靡レ遵、仍世載レ德、荒二之予身一」

【從容】　シ゛ウヨウ。打くつろぎてゆつたりしてゐるさま。おちつきて迫らぬさま。

書經に「從容以和」

【突破】　トッパ。つきやぶる。

【大義名分】　タイギメイブン。「大義」は、人倫の最も大なる義理。男女、君臣の道などにいふ。「名分」は、名義に伴ふ人倫上の分際といふことで、名とそれに伴ふ分。

【勅諭】　チ゛クユ。天子親しく人民に諭し給ふ御言葉。軍人に賜はつた勅諭の五箇條は次の如くである。

一、軍人は忠節を盡すを本分とすへし

一、軍人は禮儀を正しくすへし

一、軍人は武勇を尚ふへし

一、軍人は信義を重んすへし

一、軍人は質素を旨とすへし

【鍛錬主義】　タンレンシュギ。身體を鍛錬するといふ主義。

【融和】　ユウワ。とけてやはらぐこと。打ちとけて中よきこと。

【各部門】　カクブモン。どの部分も、皆。

【充滿】　ジュウマン。一ぱいになる、充ち滿つること。

【用兵家】　ヨウヘイカ。兵を用ふる人。兵を指揮して戰鬪せしむる術にすぐれてゐる人。

【天の時、地の利、人の和】　テンのトキ、チのリ、ヒトのワ。

「天の時」は春夏秋冬、晴曇等。

「地の利」は戰爭の時の四圍の地形。

「人の和」は人々が一致してゐるかどうかといふこと。

【看取】　カンシュ。見て取ること。

【社會生活】　シャクヮイセイクヮツ。元來人間生活を個人生活と社會生活とに分けるのは言葉の上だけであつて、實際は、個人は、社會を離れて存在せず、何等かの意味で社會的規定の下に生活する。人間のこの世に於ける生活をいふ。

【運用】　ウンヨウ。めぐらし用ひる。

中學國文教科書教授備考　卷六　終

昭和十四年六月十日印刷
昭和十四年六月十三日發行

編者　光風館編輯所
東京市神田區神保町一丁目五番地

發行者　上原才一郎
東京市神田區神保町一丁目五番地

發行所　光風館書店
（電話神田三〇八七番）
（振替口座東京三二七番）

印刷者　根本力三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社

著作權所有

吉田彌平編
石井庄司補訂

昭和十三年二月二十八日
文部省檢定濟

光風館編輯所編

中學國文教科書教授備考

△修正再版▽

中學國文教科書　和裝全拾册　洋製全拾册（非賣品）

非賣品

御審査用見本
御中越第次献呈

新教授要目準據

類書中追隨ヲ許サザルモノ備考完備

東西遊記常山紀談雲萍雜志鈔	吉田彌平編 石井庄司補訂	四七錢	昭和一四年二月八日發行 昭和一四年二月一〇日檢定
藩翰譜駿臺雜話樂訓鈔		四九錢	昭和一四年二月一二日發行 昭和一四年二月一六日檢定
平家物語太平記神皇正統記鈔		五三錢	昭和一四年二月一二日發行 昭和一四年二月一六日檢定
增鏡徒然草十訓抄鈔		五八錢	昭和一四年二月一二日發行 昭和一四年二月一六日檢定
玉勝間花月草紙琴後集鈔		五五錢	昭和一四年二月八日發行 昭和一四年二月一〇日檢定
中學日本文法 第一學年用	吉田彌平著	四一錢	昭和一二年一一月二〇日發行 昭和一二年一一月二五日檢定
中學日本文法 上級用	吉田彌平編 小山左文二補訂	六〇錢	昭和一四年二月一二日發行 昭和一四年二月一六日檢定